日本人の長所が、はつきり現れて來る。日本の軍艦の優秀性も廣く認められてゐるところであるが、これも我々が器用に敏活に屈伸自由に狹い所に立居して働くことの出來る性能をもつてゐるからであらう。

趣旨は同じ事であるが、實例を示すために、我が農業についても考察してみたい。近頃、我が農業に於ても、多少電力が應用され機械も用ひられてゐるが、御承知の通り、山岳多く耕地面積は甚だ少く、しかも耕作地も河川丘陵多くして、大農組織的の仕事は出來ない。やはり、手足の巧妙にして器用な働きによつて、耕作を營む他はない。卽ち狹い土地から最大の收穫を得ようとする集約農法である。勿論、農事に關する科學的な研究と共に、品種の改良や、肥料の撰擇・製造法等については、段々研究が加へられてゐるが、實際に土地を耕すのには、屈伸自在の腰や器用敏活に動く手足によつてする他はない。農家の副業たる養蠶業が桑を栽培し、その桑をつみ、蠶を養ふのには、まめな手足の活動を要することは、前に述べた通りである。また日本茶は綠茶として、アメリカ方面でも追々と愛用されつつあるが、その茶畑は、東海道の汽車の窓から窺はれる通り、まことに綠美しく作られてゐる。その若葉を摘み、これを製茶するには、荒々しい手先では出來ないことである。これも多く婦人の手にまつ。また田植の如きは、好個の田園風景として歌はれ、繪にも描かれてゐることで、まことに趣味豊かな行事であるが、若苗を行儀正しく植ゑて行くのには、素早く器用でなければならない。また米や麥の收穫をするにも、一々手鎌をもつて、これを刈り取る。馬車などを用ゐて、大げさにするやうな荒仕事は行ひがたい。それでは、實の損失が非常に多くなるからである。西洋の草刈りは、立ちながら大きな鎌を振つて刈るが、日本では、しやがんで手早く小鎌で刈る。外國人がこれをまねたならば、十分もたたない內に、腰骨が痛くなるであらう。されば野菜・蔬菜の栽培の如きは、かがむことに長けた腰の持主でなければ、能率があがらないであらう。園藝作物も、その果實を摘み取るには、荒々しい無器用の手先では損失が多いであらう。果樹・野菜・蔬菜の我が國に多いのは、勿論、氣候の關係もあり、土地が狹いので集約的にせねばならぬ必要からでもあるが、また日本人の腰や手足の器用なことにもよらねばならない。それらは、おのづから相互關係をなしてゐることである。米國には、從來我が勞働者が多數に移住してゐることは周知のことであるが、その大多數は農夫である。赤かぶや、セロリ、莓、柑橘などの野菜・果物類の栽培を營んでゐる。實にカリフオルニアの如きは、農業方面からいへば、日本人の器用な手足が、これを開拓したといつてもよいであらう。今日ロスアンゼルスには日本人の野菜市場が大なる勢力を有してゐるが、以上の理由によること

があらう。また南米ブラジルに於ける日本移民の發展は、農作物を作るに最も適した性質をもつてゐるからである。

農業に聯關した仕事で、我が國に近來大に發達して來てゐるのは養雞業である。これは世界的大會も時々行はれる模樣であるが、その際に、世界的に驚異の問題となつてゐることは、幼雞の雌雄鑑別法に、日本人が特殊の技能を有してゐるといふことである。先年、アメリカから聘されて、その鑑別法の技術を敎へに行つた技師もあるが、アメリカ人には手先の無器用のためか、十分に出來ないといふ話である。また最近は英國でこれが問題となり、その實驗が日本人技師によつて行はれたとかいふ話である。とにかく、かかる妙技は日本人の器用性の賜物である。

日本人は、よく働く國民であると屢々評されるが、これは一面から考へれば、機械によつて大仕掛に仕事をするのでなく、狹い所で、器用に自在に働かねばならぬし、また働き得るからである。いひかへれば、常にまめ〳〵しく働く事が出來、また、さうせねばならぬから、おのづと暇さへあれば働く習慣が養はれる。そして外國と離れて、久しく生活して來た日本國民は、一切の物を自給自足的に生產せねばならなかつた。また家族的に農業をして來た習慣性は、個人的に打算的に考へることを敎へない。そこで、家のため皆のためと思つて、寸暇を無駄にせずに働く性質を養つて來てゐる。勿論、怠け者がないといふわけではないが、環境の事情もあり、まめに器用に働き得る性質をもつてをり、また實際能く働いてゐるので、外國人には特にその狀態が眼に映ることと思はれる。

なほ、日本人は漁業に長けてゐることは世界一といはれる。まことにさうでなければならないとも考へられる。何故かといふと、太平洋中の島國であるから、魚介を取つて生活の資料とせねばならないからである。今日は、漁業も西洋流の機械道具をも用ひてゐるが、沿海漁業は、やはり昔流の釣針や網を用ひて巧みに行つてゐる。かやうに漁業に長ずる日本人は、或は北の海に、或は南の海に、或はアメリカ大陸の沿岸にまで出かけてゐる。その技能のすぐれてゐる限り、必然の勢ひといつてよからう。

漁業と聯關して、一つ語つて置きたい問題がある。それは、私がダヴリンの世界敎育大會に出席した折りのことである。或る日、私が我が人口は、本島のみで、約七千萬人に達するといつたところが、周圍にゐる人々は驚いて、どうして、あの狹い土地に、そんなに多くの人口を入れることが出來るかといふ疑問が起つた。私は、その時、日本は狹くはない、實は大きい國だと笑ひながらいつた。なぜかといふと、外國では食料品を專ら陸地から取つてゐる。穀物・野菜・肉類

などはさうである。然るに、我が國では陸地からのみでなく、海の中からも非常に多くの食料を得てゐる。我々の常食は、魚類が半分を占めてゐるといつてよい位である。それには生物・鹽物・干物がある。日本人にとつては、海は一種の田畑で、生産的には土地と同じことである。それ故に日本は廣い。人口稠密は、それほど恐るるに足らないといつて、人々を驚かしたことがある。人々は驚きながらも、それは面白い、しかも本當の說だといつてゐた。もとより人口は稠密であるので、何とか、はけ口を求めねばならないのであるが、とにかく、これまでこれほどまでにつめこんで生活して來たのは、食料として、器用な敏捷な手足の活動によつて、大海から魚介をとつてゐたからである。これは經濟生活の上に、御互に知つてをらねばならない重大の事柄である。

なほ、十數年前から、我が國はオリムピック・ゲームに參加し、最初は殆ど入賞する者はなかつた有樣であつたが、先年ロスアンゼルスの大會以來、漸く我が青年選士の特技を發揮するに至つたことは、我々の喜びとしてゐるところである。いかなる競技に於て、日本人が優勝してゐるかといへば、それは陸上では三段跳びと棒高飛びであり、水上競技では斷然優位を示した。日本人の體格は大きくなく、體力も勝れてゐるとはいへない。しかるに、かかる種類の競技に優位を示したといふことは、日本人の關節運動の器用さを明白に物語つてゐる。三段跳びの如きは、腰や膝の筋肉の屈伸自在な彈力のあることを明白に示してゐる。また手足の關節が敏捷に自在に動かねば、水を切つて速く泳ぐことは出來ない。かのテニスの如きは、第一等を示す域には至つてゐないが、割合に高度の技倆を示してゐるのは、これも身體が器用に敏活に動くからである。ただ身體の短小なことは、競技上何としても補ひ得ない缺點になつてゐるかも知れない。しかし近來の敎育の效果は、青年男女の身長を非常に增加してゐることである。數十年の後には、日本人の體格もよほど長大になつてくるであらう。

なほ我が國の國技として角力がある。相撲取の身體は、日本人には稀な體格美を示してゐる。日本人種の中にも、かかる種の潛んでゐることを示すものであらう。相撲は、單に動物的な力によつて爭ふのではない。拳固をもつて打ち叩くといふやうな殘酷のことをするのではない。押すにも、はたくにも平手を以てし、相手の身體を傷けぬやうに心得られてゐる。そして直徑二間位の圓い土俵の中で、いはゆる四十八手裏表の巧妙な技をつくして、相手を倒し、または土俵外に押し出すことを爭ふ。これは力と器用との組み合された一つの藝道である。また柔道といひ劍道といふも、我が固有の武道とされるもので、これには精神訓練が重んぜられてゐるが、とにかく敏捷と器用そのものを現はしてゐる技術である。我が國を訪れる外人は、時々宴會に招れて大神樂の曲

藝をもつて歡待されることがあるであらう。これは見物した者でなければ、いかに說明しても、解りかねることだが、實に驚くべき巧妙さと器用さを以て、まりや、棒や、その他のものを用ひて、千變萬化の曲藝を示し、觀衆の眼を驚かし、心をそそる。先年一つの米粒に千の文字を書くといふので、有名になつて、アメリカまで渡つた青年があつたが、これもまた、いかに細かい器用な手をもつてゐるかの證據とするに足りよう。

私は、以上くだ〳〵しくも日本人の器用であることについての實例を、出來るだけ日常生活から拾つて說明した。たしかに器用なことは、我々の生れ付きである。もとより熟練もこれに伴はねばならないが、この點については、世界一といつてもよいかも知れない。過去の文化的作品が、この特長を示して來たやうに、今後も、この特長を示す新作品が現はれることと信ずる。しかしながら、器用であるといふことは、長所であつても、それが、すべてにまさる長所であるとはいへないのは、勿論である。けれども、長所である限りは、我々は、それをよりよく養ふことに努めなければならないことも、いふまでもない。しかしまた、長所の半面には同時に短所が伴ふ。昔から日本を訪れた外人の日本人評を見ると、我が國民の器用であることを認めてゐる者は多いが、同時に日本人は、論理的な組織的な判斷力を缺いてゐるやうに觀察してゐる者も、相當にある。西洋の文化輸入以來のあはただしい我が文化生活の狀態を、外人からみると、さやうに評されても、多く抗議を申し立てることが出來ないやうにも考へられる。といつて理論的の思考には見込みはないなどといはるべき道理はない。さういふのは酷評である、と語る外國人の古い觀察記もある。靜かにこの六、七十年間の我が國の進步を見れば、自然科學的方面に於ても、精神科學的方面に於ても、相當の人材を出し、長足の進步を遂げてゐる。野口英世博士の如き有名な世界的學者も出てゐるし、その他特殊の問題につき、有名なる學者を、色々の方面に於て出してゐる。實に、ニユートンやライプニツツが微分積分の數學を發見した當時、我が國には、關といふ數學者が出て、同樣の數理を發見してゐる。これは數學專門家の語る所である。ただ全體的にながめると、論理的な判斷を用ひる方面の學藝が、明治以前に於ては發達してゐなかつたとはいへる。そして我が國民の長所が、器用であるといふ點に、特に現はれてゐる限り、抽象的な論理的な考へ方は、それに比しては、劣つてゐるといひ得ることは、我々自らも承認せねばならないことであらう。しかしながら、更に深く考究すると、眞理そのものは結局、論理的なものであるか、文化そのものは結局、科學的・機械的なものであるか、また且つ論理的眞理と機械的文明とが、人生の幸福をもたらす唯一無二の條件であるかは、もとより大なる疑問である。それについては、更

に反省と思索とを要することであるが、とにかく理論的に考へる力がないよりは、ある方が良いのは、いふまでもない。それ故に、もし乏しければ、これを養ふやうにつとむべきは、勿論である。近代の日本人は、その方面に多くの注意を拂つて來た。かくて、もし我々がもつて生れた器用性の上に、更に論理的な思辨力を十分に加へる事が出來たならば、まことに幸ひである。しかし、それは我々自身の反省と修養とによることで、ここに豫め斷定するわけにはいかない。とにかく、自らの長所を知る以上は、同時にそこに缺點の伴ひ易きことをも認めねばならないので、我々はその短を補ふの用意のあるべきは當然である。

（四）藝術的・趣味的なること

日本人が藝術的技能に長け趣味に富み、美を愛することは、一般に外人にも認められてゐる一つの特徴である。これは前に述べた器用といふ心理的性質にも關係があり、後に語らうとする諸性質にも關係があるので、多少重複の嫌ひは生ずるが、この一項を特に取出して述べておく。

人間の生活は無論、實用を主とせねばならない。衣食住の實際生活には、いかなる方法が便利であり實用に適するかを、主として考へて、行つてゆかねばならないが、日本人は、その實用的生活の中に美的趣味を味ふことを常に求めてゐる。もとより、美を愛し趣味を好むことは、人間の通有性であるといつてよく、文化人の本質は、その趣味生活の高尚なることにあると稱してもよい。しかし日本人にあつては、その性質を實用生活の内にも現はさうとしてゐる。實用であつて同時に美的であることを求める。即ち何かの趣味的特質を日常生活の内に現はさうと欲する。この點に特徴がある。要するに、日本人にとつては、趣味と實用とは別々に考へられない。衣食住の實際生活に即して、その間に常に趣味を味はうと心がける。いひかへれば、その環境を美化することを樂しみとする。無趣味・無風流の實利主義は、日本人の嫌ふ所である。それ故に、都會地の家屋の立て込んだアパートの二階の窓にも、美しい草花の植木鉢を竝べて、その住家を美化することに心を用ひないものはない。山川・草木の自然美を愛することは、日本人の一つの性質で、それはまた、別項に於て語りたい所であるが、日本人は、その住む所に於て、その有てる物に於て、その行ふことに於て、生活を美化し趣味を味はうとする。それには、いはゆる、しやれ氣といふやうな氣分も伴つてゐるが、輕薄の意味にのみ解される、單なるしやれ氣ではない。日本人が愛する美の特質は、いかなるものであるかは、別に詮義を要するが、こゝには、先づいかに藝術的な趣味的な生活を好むかを述べて置きたい。

建築について觀察しても、日本流と西洋流とに大なる特質のあることは明白である。それぞれに特色ある美を表現してゐるが、西洋の建築は日本のそれに比しては、實用味が勝つてゐると評することが出來よう。日本人は、その形に於て、その色合に於て、單なる實用以上に、いかにそれが一種の美的感覺を與へるかに、心を用ひないものはない。我々は、一面に於ては、極めて感受性の強い國民であるといはれるが、形や色から來る一種の感じを直觀することに長けてゐる。從つて單なる實用的方面の生活にのみ滿足することが出來ない。かういふ點から生活の趣味化といふことが、生活の合理化と共に生活論として要求される。一般的に見て、日本の家屋は何となく輕い柔い感じを與へてゐる。私は、先年サンフランシスコとニューヨークの兩市で、世界博覽會を見物したが、日本館と他の外國館とが觀客に與へる印象の著しく相違することを痛感せざるを得なかつた。ロシヤ館は巨大であり、アメリカの諸館は機械的で實用的であるに比して、日本館は外からも內からも、柔か味とやさし味と藝術味とを與へるので、非常のコントラストを感じた。これは氣候や地震等の關係にもよるであらうが、巨大な重々しいものは日本の家にはない。古い寺院の建物などには相當大きいものもあるが、それも單に巨大なものでなく、周圍の自然と調和し、どこかに靜かに和やかに、深い落つき味のある、宗教的な感じに適するやうなものに造られてゐる。日本の建築には常に何かの趣味的感じがつきまとつてゐる。しかし外國の建築には少しも美的表現はなく、日本のそれにのみあるといふのではない。勿論、それは趣味そのものの相違でもある。

日本人の室內の日常生活を觀察すると、疊はよく掃かれ、椽側はきれいに拭はれ、障子・襖はやはらか味のある落つきを保ち、壁の色も、その部屋の用向き、性質に從つて調和するやうに塗られ、襖には唐草模樣や花鳥や草木が描かれ、その部屋を美化してゐる。かの床の間や、違ひ棚の如きは、全然實用的の意味で作られたのではない。その床の間には、繪もしくは文字の掛軸がかけられ、その違ひ棚には、何か趣きのある珍らしい置物が置かれてゐる。それも、澤山にごたごたと竝べ立てられるのではなく、別の所に藏つてあるものの中から、一つ二つを時々取り代へて配列する。又掛物の如きは、時季に適し、場合に添うたものを、その折節に取り出して、かけかへる。年中一つものをかけてゐるのではない。日本人が趣味をあらはし、美を樂しむに當つて、かやうに一度に澤山は出さず、二三のものを折々に出して、それだけによつて、その美の正味を十分に味はうとすることは、日本人の趣味生活の一特質といつてよい。これは側面からいへば、一つ二つによつて、ゆつくりと、客人にその美を味はしむると同時に、更に他に多くの良き物の

あることを想像せしめ、何となく奥ゆかしさを示し、餘韻を感ぜしむることである。一邊に澤山のものを、そこに竝べる西洋の展覽會式のあらはし方とは、いささか趣を異にしてゐる。また、その部屋には必ず生花が配置してある。それも單に無雜作に色々の草花をさし込むのとは異り、一定の原則に從ひ、一種の美的表現をなすために、無用の枝葉はとられて、簡單な姿の間にも、くつきり、あざやかに、その美を表現するやうに工夫されてゐる。

かやうに日本人の住居がきれいに保たれ、落つきと、柔か味のある趣味が示されてゐることは、實用生活と趣味生活を一致させようといふ要求から來たものである。昔は、建築の樣式について武士の家と商人の家とは、作り方を異にしなくてはならなかつたが、今日は、さういふことはない。しかし今でも嚴格の作り方と、格式をくづした作り方があり、武家造りと商家作りとの名殘を留めてゐる。そして殊に趣味的性質を帶びたものとしては、茶室がある。これには昔からの傳統が堅く維持されてゐる。家屋も周圍の自然と共に調和されるやうに出來て、そこに茶を汲む人も自然の環境と同化されて、一種の禪的趣味が豐かにあらはれてゐる。茶室は大きくない。多人數が集まる所でない。それは老木の生ひ繁れる庭の中に、極めて簡素にしとやかに作られ、その周圍には勿論、その室の中にも木々の陰影が巧みに取りこまれ、何となく自然と心が通ひ合ふやうに出來てゐる。しかも見る人々の心の眼によつて、色々の美的幻影をおこすに適するやうに出來てゐる。ちやか〳〵と明るく濃色で彩られた建物でなく、素朴で空寂で、自然の移り變る陰影の中にあるので、何となく俗界から遊離して、詩趣豐かな、含蓄の多い境地を現出してくる。かかる茶室に於て、客を招き茶を汲んで、もてなす方法については、いはゆる奥儀があるので、ここには述べかねるが、この場合は、必ずしも實用と一致した趣味ではなく、むしろ全く實用を離れた趣味といへるかも知れない。しかし、そこに實踐的修養の意味のあつたことは忘れてはならない。これは德川氏以前、戰亂の時代に於て發達した趣味生活であるが、想ふに、兵馬の間に馳驅した武人達が、その心を靜め、生死についての悟りを開くために、一種の精神的修養として味はつたものであらう。かの有名な武將・豐臣秀吉の如きは、元は一介の野人であるが、晩年には大いに茶の湯の趣味を味ひ、これを奬勵した。武人生活の半面には、かういふ生活振りが必要であつたのであらう。なほ一面から考へれば、我々日本人は、割合に氣の早い心理的性質を有つてゐるが、これを矯めて、落つきの出來るやうに修養するのには、かういふ趣味生活が必要と感ぜられたのではないかとも思はれる。何れにしても、かういふ趣味生活が今日に於ても、實業家や政治家などの極めて多忙なる人々に好愛されてゐることは事實である。そして接待の役目柄、婦

人の修養としては一應誰も心得ねばならないことになつてゐる。

茶の湯といふ格別の式に由るのでなく、一般にお茶を飲むといふことは、古くから我が國民生活の習慣となつてゐる。どこの家でも、三度の食膳に坐る時ばかりでなく、合間に飲むことは、西洋人の紅茶を飲むのと同じ事である。これには別段の禮法はない。一般的趣味である。そして家に御客があれば、必ず御茶を呈する習慣になつてゐる。家庭に於てばかりでなく、商店に於ても老鋪といはれるやうな所では、買物に來たお客に、お茶を出す事を禮儀としてゐる。これも商業と趣味との併合であるといつてもよい。そして家庭に於てお客にお茶を出すには、嚴格な茶の湯の式によらないとしても、一定の禮儀作法を守つて出さねばならない。これは多く婦人の行ふ所である。茶を盆にのせて客の前にすすめるにあたつては、その部屋に入る時の障子の開け立てや、客の前での坐り方や、お茶のすゝめ方など、一定の作法がある。單にお茶の接待ばかりでなく、客に食事をすゝめるにも作法がある。そして食膳にならべられた椀や皿やは、それぞれ美しい美術品であり、その中に盛られた御馳走品は、口に入れるには、あまりに色取美しく出來てゐる。故に日本人は口で喰べるのでなく、眼で喰べるのだと評せられるほど、食膳は藝術的趣味が横溢してゐる。これが給仕は、しとやかに訓練された婦人の作法によつてなされる。そして、この作法そのものが一つの藝術的な作法であり、趣味生活の表現である。日本婦人の動作をしとやかならしめ、その心を優雅ならしむるのに、この日常の作法が與つて關係のあることは明かである。

日本の着物、殊に婦人の着物が、外國人に珍重され、その美しさは世界第一と賞められてゐることは、誰も承知のことである。けれども日本の着物は實用本位の立場から見れば、洋服のやうに實用的とはいへない。しかし日本人は、その住む處に趣味を現はさねば承知しないやうに、その着る物に、また持つ物に、美化を施さねば承知しない。勿論、どこの國の人も、その身なりを美しくしようと思ふのは、一種の本能的要求だともいへる。故に、これは日本ばかりではないが、西洋の衣物とは甚だしく異つてゐる服裝であるので、殊に西洋人の目を引くのであらう。この服裝の美について、日本と西洋との特質を考へてみると、日本の方が靜的であるに對し、西洋の方が動的だといへる。動的であるといふことは、實用的であるといふ意味が、より多く勝つてゐるためであらう。日本の方では、實用と趣味とを合せようとするのであるが、婦人にとつては、見える趣味の方が勝つて來るので、靜的になるのであらう。西洋婦人の服裝は一定の形をもつてゐない。その布の裁ち方は自由であり、色々の變化を示し、各人の好み次第である。いはゞ個人本

位的に自由があると評してよい。しかるに、日本の着物は、男も女も裁ち方、縫ひ方に於ては、殆ど一樣である。しかし、これをその身に着こなすについては、前にもいつたやうに、身體の器用なる働きを要する。そして、色合については非常に多種多樣である。即ち、目に映つる色彩は、實に種々の配合と變化とを持つてゐて、それによつて樣々の趣きを生じ、感じを與へてゐる。我我日本人は色彩感覺の强い國民であるかも知れない。天然が、多くの種類の樹木・草花に富み、各種の色合ひを示してゐるが如く、日本は自然も人も色彩に富んだ國であるかも知れない。その點に於て、おのづから美的趣味が養はれてゐるのであらう。ネオン・サインの如きも、夜の都會を彩るについて、日本のものが一番よく出來てゐると評した外國人もある。日本の都會が至る所樹木を以て彩られ、綠の街路樹の並木の中に街が和らげられるのも、我々の趣味をあらはしてゐるものである。

刀劍は、どこの國にもあつて、戰ひのために用ひられるものであるから、血腥い殘忍性の表徵をなしてゐるものと考へられるが、我が日本刀は一種の立派な美術品として取扱はれてゐる。武士は戰場に於て生命を賭して戰はねばならぬ身分であるが、前にもいつた如く、武士の修養は、いはゆる嗜みあり、品位を保つた生活でなければならなかつた。そのやうに、その腰にさせる大刀は、戰時における實用品であると同時に、常に身邊近く愛玩される美術品として尊重される。その刀身に薄く照る光り、その婉曲な線、その刀面に浮ぶ薄雲の如き模樣、さういふ照りと線と、刀のはだ合ひのにほひとは、これを觀賞するものにとつては、何ともいへない一種の風味が感ぜられる。また、その柄や、つばや、鞘の如きも、極めて念入りに作られ、殊に金銀の飾りの如きは、刀匠が丹精を凝らして作り上げるもので、今日では、巨額の金をもつてしなければ、到底得られぬ美術品となつてゐる。即ち武具は同時に藝術品をなしてゐる。また鎧甲を西洋のそれに比較すると、日本のものが、いかに美術的であるかが知られる。そして緋縅の鎧を身につけ、鍬形打つた甲の緒を締め、連錢葦毛の駿馬に跨がり、悠々とのり出す武士の姿の如きは、一種壯美の表現となつてゐて、武者繪として、畫伯によつて繪卷物などに描かれてゐる。

また武士の眞劍勝負といはれることも、無作法にだしぬけに斬り合ふのでない。昔は互に名乘りを上げ、一種の禮法を示して、然る後に眞劍勝負に及んだ。かくの如く、戰ひといふが如き腕づくの事柄の間にも、武士には、その動作を立派にし、美しくしようといふ心構へが存してゐたことを知るべきである。晴れの戰ひに出陣するにあたつては、武士は、その武具をよくあらためて、立派なものを身に着け、討死しても、人の笑ひものにならぬやうにと、身ごしらへをすること

とにつとめた。前にも一言した實話であるが、或る老將が、主君に奉仕する最後の思ひ出として戰ひに臨んだ時に、その甲の中には香をたきこめておき、その首を打ち取つた敵將は、その氣高き香りに心を打たれて、さすがに、たしなみのある老將だと感服したといふことである。また昔、平家と源氏とが爭ひ、壇ノ浦の一隅に平家が源氏によつて追ひ込められた際に、繪のやうに美しい一つの物語がある。それは平家方は幾艘かの船を連ねて海に浮んでゐたが、その一つの船が群を離れ、その中から美しき婦人が立ち現はれ、日の丸のついた扇を取り出して竿の先に高く揭げて、さて、岸に竝み居る源氏方に呼びかけさせていふには、もし弓矢に腕の覺えある者あらば、この扇を竿の先きから射て落して見よと挑んだ。すると、その聲に應じて那須與一といふ源氏方の若武者が、靜々と馬を汀に乘り入れ、心の中には弓矢の神の加護を念じながら、滿身の力をこめて、弓をひきしぼつて、ひゆうと矢を放すと、見事に矢は的中して、扇の要を貫き、扇はヒラヒラと海の中に舞ひ落ちた。それを見て敵も味方も、或は船べりを叩き、或は弓弦をならして、互に拍手喝采したといふことである。命のやりとりの戰ひの間に、かゝる藝術的の舞臺面が開かれるのは、我が國民の藝術的特質を優に示すに足ることと思ふ。

なほ昔、東北の野に源氏の大將・義家が敵將・安倍貞任を追ひつめた時、敵の居城の衣川の柵が落城することを諷して、弓に矢を挿みながら、背から「衣のたては綻びにけり」と三十一文字の歌の下の句を讀んで、一種の趣味的挑戰を試みた。すると、それに直ちに答へて、貞任は「年をへし糸のみだれの苦しさに」と上の句をつけた。それを聽くや、義家は敵を追ふことを止め、馬首をかへして、敵將の風流ある心中を賞めながら、自分の陣に歸つたといふ話がある。ややもすれば殘忍とのみ思はれる武的の行爲が、我が國では、いかに藝術味をもつて、豐かに滿されてゐるかを伺ふことが出來るであらう。前にも述べたことであるが、日本の國技といはれる相撲や擊劍や柔道がいかに器用にして且つ藝術的であるかゞ知られる。その勝負をみて、その動作を見事といひ、美しいと稱する。單に殘酷に力づくで勝負するのではない、いかに巧妙に擊ち、いかに美しく投げ倒すかが、肝心の動作とされてゐる。

前にもいつたが、我が國に於ては、多くの古美術品が保存されてゐる。建築に於て彫刻に於て繪畫に於て、國寶保存の制度も出來て、國家的に留意して保存されてゐる。卽ち、古くから保存されてゐるものは、殆ど皆美術品である。これをもつて見ても、美術好愛の國民であることがわかる。日本の美術を知るには、かゝる國寶品を研究しなくてはならない。しかし、近代になつては衣食住の樣式の中にも、美術品そのものの中にも、西洋趣味は多分に取入れられた。外觀上、殆

んど外國趣味で蔽はれてゐるやうに見える場合もある。これも他面からいへば、日本人の感受性に富み、好奇心が強く、攝取力の豐かなるためであると同時に、美を好み趣味を尙ぶ性質があるからである。けれども、單に西洋風の趣味をそのまゝに取入れるのでなく、これを從來の趣味の中に、いかに調和して、我々の趣味生活を更により美しく豐かならしむべきかといふことは、我々の常に意を用ひてゐる所である。

かやうに述べて來ると、日本人は趣味を尙び、趣味に生きる國民であることがわかる。常に、どこかに餘韻のあり、なごやかな感じに生きたい、といふことを希望する國民である。嚴格な論理的な、また單に實際的な生活を、その特質とするものではないやうに思はれる。武士道の如きは、嚴格なる自己責任の意識は強いが、しかし、一面には武士の情とか、たしなみとかといはれるやうに、どこか單なる理論や實行だけではない、趣味的な人生觀に生きようといふ態度が見える。一般的にいつて、情緒の調和的になごやかに、わだかまりのない態度に、人生觀を見出さうとすることは、日本人の一つの心理的性質であるといつてよからう。これが卽ち藝術的な風格を日本人がもつてゐる所である。他面からいへば、事を理論的に解決せずして、「まあいいぢやないか」といふやうに、何となく感じの行きわたり調和するところに、いはば情意的解決を求めようとする態度のあるのは、これである。なほ、それらの點は後段に於て更に考察してみたい。

(五)　自然を好愛すること、自然主義的なこと

日本人が自然を好愛することは、隱れもない事實であるが、これは前の藝術的な性質とも離るべからざる關係がある。日本人は誰も草花を好み土を愛し、日々の生活の間に趣味生活を入れようとする。尤も、我が國民の大半は農業に從事してゐるといふ關係もあらうが、百姓ならざる人も一般に土を愛する。どんな、ささやかな家にも、小さな庭を作り、そこに樹木を配し草花を植ゑて、自然の生長を眺めることを、その日その日の樂しみとする。近代式の都會生活に於て、土の見られない所では、その窓口に草花の幾鉢かをかざらずにはゐられない。今日は西洋の文化を受けて、コンクリート造りの家に住む者もあり、鋪裝した道路は誰でも歩かねばならない時代となつたが、本來の趣味からいへば、石や鐵やコンクリート造りの家や、鋪裝した道路の上には住みたくないのが、日本人の心持であらう。自然を自然のままにあらしめ、そこに美を味ひたいのが我々の要求であるからである。

實に我が國の自然そのものが、いかに美しいかは、世界を旅行する者の特に感ずる所である。外

國人も日本へ來て、その山川の趣きが他國とは異り、特に變化があり色彩に富んでゐることを賞めてゐる。大洋に取り圍まれて、海岸線の屈曲は非常に多く、砂白き海邊に育つてゐる常盤なる松の面白い枝振りの姿などは、外國に於ては見られぬ風光である。樹木の種類も非常に多く、また、よく繁茂してゐる。從つて秋に散り春に芽生えする木の葉や花の色や、四季樣々の草花の千紫萬紅の姿は種々に移り變りつゝ、人目を樂ませてゐる。田舍に樹木の多いのは勿論のことであるが、都においても、日本程、樹木の多い所はあるまい。自然を愛する心は都の內にも充ち滿ちてゐる。そして老齡の大木の至る所に聳えてをり、それが心して保存されてゐる。美術品を保存すると同樣に、老樹大木が愛護されてゐる。古い家柄の庭には、必ずその古き歷史を表徵するやうな大樹が守り神のやうに高く繁つてゐる。また神社や佛閣には千百年を經たやうな杉や松や檜や楠の大木が、その社殿や伽藍を圍んで、美しく繁茂して森をなし、その境內の靜けさと神聖さとを保つてゐる。想ふに、その土地に大木が保護されて榮えてゐるといふことは、その土地の歷史の古いことを示してゐる。永くつゞいた家の庭にある大木は、その家の歷史を語るやうに、至る所に大木が聳えてゐる國は、その國柄の歷史の古いことを證據立ててゐる。易姓革命があり、歷史が中絕し、新しい民族や、國家が代り代りに興亡するやうな國に於ては、次第に古き樹木も伐り倒されて、その舊態を殘すことは出來難いであらう。私は、ヨーロッパ諸國を旅行して見たが、我が國程に、古い大木が至る所に愛護されてゐる所は、少いやうに觀察した。故に、古い木のある所は、古い歷史のある所であると、概括的に判定することが出來ようかと思ふ。

それはとにかく、自然そのものが、繪のやうに美しい日本に於ては、その住民たる我々に自然を好愛する心の强いのは、自然にして且つ當然のことであらう。實に日本人の大なる快樂の一つは自然を見て樂しむことである。遊び樂しむことを一と口に遊山といふが、それは山に遊ぶといふ字であつて、諸所の風光を見物して心を慰めるといふ意味である。月雪花とは日本人の樂しみの三つの大いなる對象を語つたものである。月見は九月・十月の秋空高く澄んだ時に、新鮮な野のもの山のものを盆に供へて、障子を開け放つて、東の空にあか〳〵とあがる滿月を迎へながめ、夜の靜かに更け行く大空の風光を、一家擧つて樂しむのであつて、こゝに夜の自然の魂と一になるやうな心持を味ふ。勿論、小さい人々は御月樣に備へた供物を頂戴することを期待してゐるであらう。そしてその際には、或は漢詩を吟じ、或は歌を詠み、或は俳句をつくるものもある。よし詩歌を語らなくとも、一種の詩的に美的な心境に於て、その夜景を味ふ。或は雪見と稱して、雪の朝早く、未だ人足でふみにじられない、白々とした淸淨の雪景色を見るために、近き野に、或

は丘に散策する。そして塵埃を一掃した、すべてが銀一色に、なだらかに塗りあげられた平和の景色を味ふ。花見については色々の場合がある。有名なものは、櫻の花見であることは周知のことである。日本國中至る所に櫻の名所があつて、四月の初め頃には、凡ての運輸機關が、全力を盡して春色を樂しむ人々の旅行に便宜を計つてゐる。或はつゝじ、或は藤、或はあやめなどは繪にも歌にも常に描かれ歌はれてゐる。秋には菊の花は、最も美しきものの一つであり、皇室の御紋章ともなつてゐる。秋の紅葉は花ではないが、紅葉は春の花より美しいと歌はれるやうに、花見と同樣、人の遊心をひくものである。かの有名な箱根や日光に於ける滿山の木々の濃き薄きもみぢの色どりは、多くの旅客の賞美おかざる所である。とにかく、春夏秋冬を通じて、山川草木の美景を眺め、大自然の懷の內に、我が思ひを入れて、情景一如の世界を樂しむのは、日本人の心理的特質である。

序にいふが、日本人の姓名は外國人のそれと異なり、山川草木にちなんだものが多いことである。苗字の如きは、殆んど悉く自然に關係したものばかりである。山川とか山野とか秋田とか大島とか小島とかいふのは、土地からとられた姓である。また春とか冬とか夏とか秋とか、花とか櫻とか梅とかといふ男女の名は、皆自然からとられたものである。卽ち日本人の姓名の多くは、それぞれ何かの自然物を表徵してゐる。まことに自然を好愛する人種にふさはしい姓名である。尤も同じく自然物であるが山川・草木に比すると動物から姓名をとることは少い。姓を動物からとるものは殆どないが、名には相當ある。虎とか、熊とか、猪とか、鶴とか、龜とかいふ類で、魚類・虫類は殆どない。

近頃は自然を樂しむについて、スケートとか、スキーとか、ハイキングとか、山登りなどが行はれる。これは西洋式の遊び方であつて、殊にスキーの如きは、十年この方大流行をなしてゐる。健康保健のためにも良いことである。しかし、從來の日本流の樂しみは、むしろ自然を眺めて、自然の中に、自然と共に、自然の如く住むといふことであつて、單なる肉體的運動を主とするものではない。勿論、花をたづね紅葉を慕つて、山野を歩きめぐることは、おのづから肉體的運動であり、健康に資することではあるが、自然の上に働きかけて、人間の力を示し、自己の運動感を樂しむといふのではない。西洋流のスケート・スキー・山登りなどは、その間に自然の美を樂しむことでもあるが、それよりも、むしろ人間の力を示し、自然を凌駕して、そこに人力による克服・支配の樂しみを味はうとする點が强い。我が國でも、近來は國立公園も設けられ、ドライブ・ウエイも造られ、自動車に乘り廻して、縱橫に山河をわたるやうな設備が講ぜられて、外國

觀光團の樂しみにも備へるやうになつて來たが、本來の日本人の行き方から考へると、ドライヴ・ウエイを自動車で走るよりは、自然に出來た小路をそぞろ歩きし、あたりの景色を眺めながら、自然のそよ吹く風に肌を拭はれ、自然の息を吸ひ、自然そのものと一つになつて行くやうな感じを得る所に、大自然鑑賞の味ひを持つ。いはゞ、自然を征服するより、自然と同化するといふのが、從來の日本人の心理的態度である。これは歐米人と日本人との自然觀の相違と稱してよい。尤も、近代の日本人は色々の意味で、西洋流の考へ方・仕方を受け取つてゐるので、或は自動車を驅つて空間を支配し、或は飛行機に乘つて時間を短縮するやうな快味を欲しないのではない。なほ進んでは、種々の方面に於て、自然を征服し、自然の上に人力を發揮する企劃を立てることは、現代生活に於て必要なことである。さういふ科學的に物質利用の方面に於ては、從來の我が生活に缺陷があつたのであるから、さういふ考へ方・仕方について、自覺と反省とを要することはいふまでもない。しかしながら、日本人本來の心理的態度は、その方面に特徴を有するのでないことは明かである。そこで西洋人の中にも、我が國があまりに西洋式に近代化して、昔ながらの自然美を破壞するやうな事のあるのに、遺憾の意を表するものもある。これは一應納得せねばならない說であるが、さりとて昔のまゝにゐることも出來ない。そこで自然に對する兩面の態度を、どういふ風に調和すべきかが、あらゆる事項に關する東西文化の融合と共に、我々に與へられた問題である。

とにかく、西洋の文化は、自然をありありと克服凌駕することにある。人間の知力・意力を自然の上に施し、いかに人力が大きく强く働き得るかを誇示しようと試みる。大きな石や煉瓦の建築、コンクリートの建物、雲を摩するやうな高い塔、いづれも皆人間の力を誇りげに現はす文明である。然るに、日本に於ては、かやうに人間の力を示さない。すべての家屋は樹木に圍まれ、それと仲よく調和するやうに、いはゞ謙遜に建てられてゐる。これは一面からいへば、科學的思想が乏しいとか、自然征服の意志力が足りないとか、自然を我がものとしようとする野心が少ない、とかいふ見方からも解釋されるかも知れないが、何れにしても自然を、なるべく破壞しないやうに、それを、そのまゝにあらしめ、しかも、それを利用し、それと共に仲よく暮らしたいといふやうな自然好愛の心をもつてゐることは、たしかである。自然を破壞しないで、そのまゝに利用するといふことは、例へば藥についても、さう考へられる。西洋流の藥品は化學的製法に從つたもので、全然自然のまゝを破壞し、これを分析して、その中から藥餌となり得る要素を摘出して調製したものである。然るに我が國の從來の藥品は多くは藥草である。草の根または木の葉

や皮や實などを、そのまゝに貯藏しておき、病氣の際、それを煎じて呑む。これを漢法醫藥といふから、昔支那から傳へられたものである。從つて東洋流といつてもよい。とにかく、かやうに原物を破壞せず、そのまゝに用ひる所に、却つて效能があると考へられてゐる。勿論、現代の如く科學の進歩せる時代には、漢法醫的藥餌を以て滿足することが出來ないので、我が國でも各種の科學的藥品が研究され製造され使用されるに至つてゐる。その點からいへば、西洋流の考へ方の勝ることを認めなければならないが、それは實用生活についての事柄であつて、ここにいふ自然に對する心理的態度の問題ではない。

とにかく、自然に對しては、日本人は自然の中に、自然と共に、自然の如く住み生きようとする態度が、その特徴をなしてゐるが、西洋では自然を人間の便利實用のために征服して、そこに人間の威力を示さんとする要求が特徴をなしてゐるといへる。即ち日本人は、自然を愛して自然の如く生きようとする意味で、いはば、自然主義的であるが、西洋人は、人間の力を示し慾望を滿足させるために、自然を作り變へようとする意味に於て、人間本位的である。かくして西洋では、自然を觀察し、分析し、これを人間の要求のために使用し得るやうに試みる科學が發達したが、自然をありのまゝに見て、自然と共に生きようとする態度を特徴とする日本人に、自然科學的の研究が從來進んでゐなかつたのも、いはれあることと思ふ。然しながら屢〻述べたやうに、近代の日本人は、從來の態度に加へるに、西洋流の科學思想を受入れることにつとめ、相當成功しつゝある。

けれども飜つて考察すると、かゝる科學主義的態度が、大自然の中に住む人間の唯一の行き道であるかについては、根本的な人生觀・世界觀として、改めて反省に値する問題である。西洋に於ても、「自然にかへれ」といふ思想は、繰返し唱へられたこともある。といつて、この近代文化生活を後戻りさせることは不可能であらうが、ひたすらに自然を破壞して、人間の用に立てる方向のみに進んで行くことが、人類の將來の幸福をもたらす道であるかは疑問である。自然と共に住まはうといふ考へ方は、極端な人間競爭を避けようといふ心であるが、自然を我れ勝ちに征服しようといふ考へ方は、我れ勝ちな競爭心を互の間におこすことにもある。自然を征服するといふ人間本位的の考へが、全人類本位的とまでは行かず、一國本位的になり、一團體本位的に止まると、そこに利己主義を伴ひ、從つて科學の研究が秘密主義になり、その應用が極端な殘酷な科學戰にもなつてくる。故に、ひとへに自然を破壞し分析し、人間の實用のためにのみ作り變へようとする考へ方を、一途に肯定することが、果して人類の平和と親善と福祉とをもたらすゆえん

であるかについては頗る疑ひを存する。なほ近代科學工業の發展と共に、各國は相競ふて、大地を堀つて石油を搾り上げ、或は石炭を取り出して、地球の中を空にするやうに企て、或は樹木を伐り拂つてパルプをつくり、フアイバーを取り、かくて大急ぎに自然界を破壞してゐることは、やがて自然から大なる復讐をうけないとも限らない。自然を破壞しこれを亡すことに大急ぎになることは、結局人類の行詰りと滅亡とを早く招來する結果にならぬとも限らない。その點から顧みれば、自然を愛し自然の榮えを喜び、自然の中に自然と共に仲よく住んで生きてゆくといふ態度は、人類永遠の平和的生活のために、最も大切な見方であるといへるであらう。こゝには自然からの復讐はない。自然と共に成長があるのみである。

さて、かやうな根本的な論議はさて置いて、自然を好愛するといふ日本人の心理的性質について、なほ實例をたづねて語つて行かう。この問題は、直ちに我が庭園を聯想せしむる。日本の庭園を造るには、庭師といふ專門的技術家を要する。造園術は古い歴史をもつもので、これに關しては澤山の書物もある。一つの立派な藝術である。布の上に繪を書くが如く、一定の土地の上に、生きた樹木や草花や岩石で風景畫を描くのが、造園術である。かゝる技術は、前項の日本人が藝術的であるといふ性質にも關することである。そしてこの場合は、自然を好愛するといふ心を本として、草木や岩石を取扱ふのであるが、その根本の趣旨は、いかにその造られる庭園が自然的であるかといふことである。自然的であるといふのは、小さな土地の上にも、深山溪谷の自然の眺めを、いかにして如實に浮べ得るかといふことである。即ち、居ながらにして大自然そのものに接するが如き心持を味ひ得るやうに庭園を造ることである。かゝる庭園を造るには、一木一石の取扱ひにも非常な考案工夫を要する。庭師は心の中に色々の自然の風光を描きながら、一定の石や木を以て、いかやうにその姿を眼前に實現しようかと苦心する。その苦心は竝大抵ではない。一つの木を植ゑるにも、木の裏表や枝ぶりを考へ、またその位置や釣合ひを考へ、一石を取扱ふのにも、こゝに据ゑて見て、あそこに寢かして見て、いかにそれが自然にして面白味があるかを考へる。庭師は決して事を急いで仕上げない。美術家が繪を考案するが如く、氣長に一木一石の配置を眺めつゝ、その植ゑ方や置き方を決めて行く。故に、實は我が庭園は若心慘憺の技巧の後に築造されるのであるが、しかし、その出來上つた結果に於ては、人爲人巧をいささがも用ひなかつた如く、恰も昔から、さう出來てゐる自然の風景のやうに眺められることを主眼とする。實は人間の思考力と工夫努力とを大いに用ひた譯ではあるが、その結果、あらはれる所は、少しも人間の力を施した所のないやうに見えることを求める、こゝに自然主義的であるといふ意味がある。

それ故に、これは單に自然のありしまゝといふのでなく、人間の文化創造の力を費したものであることは勿論である。これは藝術である以上、當然のことである。しかし、その結果に於ては、人間作爲の跡方を少しも示すまいと努力する所に、自然を愛し自然と共と自然の如く生きたいといふ希望がある。即ちこれは文化生活上の自然主義である。この心は、人間の作爲創造を專らとする西洋の科學思想を取入れても、やがてその結果に於ては、自然的な風土的なものと一致させて、圓滿に生活しようといふ態度を實現する方法をとることでなければなるまい。とにかく、日本の庭園に比すると、西洋のそれが、いかに人間臭いものであるかは明白である。木は見事に刈りつめられて、或は丸く或は角につくられてをり、散策に適するやうに作られた道、コンクリートの一定に型どられた池、またそこに建てられた洋館は、日本のやうに木造で木影に沒するやうな家造りと、頗る趣を異にする。要するに、西洋の庭園は、人が自由に運動するのに適するやうに、または人間的要求を十分に現はすやうに、つくられてゐる。即ち人間の力を示した自然征服の跡が歴然と示されてゐる。

日本の庭には平庭もあり、築山や谷や川や瀧をしつらへた庭もある。有名なものは昔の都である京都に多くある。個人の所有にもあるが、古い神社・佛閣には大概古い庭が付添うてゐる。今いつたやうに、かゝる庭は皆自然そのまゝの姿を示すやうに工夫されてゐる。池は綺麗に人工的に緣取られないで、古い木や苔むした石で圍まれて、いかにも自然に出來た古池に見えるやうに出來てゐる。木の枝をため葉を刈られることもあるが、それも出來るだけ、その木の自然の姿を特徴づけて示すやうに仕上げられてゐる。匐へるやうにして池の上に横に伸びて行く松の枝の如きも、多年の手入れを經て作られたものであるが、それもおのづからなるやうにみえてゐる。石を取扱ふことは庭師にとつては、最も困難とされてゐる。木を植ゑるには、適當な位置を求めるのに困難でないが、大きな石を、どこの位置に配して置いたら、最も自然であるかは、甚だ工夫を要するといふ。石を巧みに取扱ふやうになれば、良き庭師だといはれてゐる位である。要するに、日本の庭園は眺める庭園である。風景を味ふ庭園である。勿論、小路は出來てゐるが、それは曲りくねつて、自然に出來たやうな道である。石を傳はり木を潜り、こゝかしこに立ち止つて、遠く廣く或は高く、いかにも大自然そのものを眺め得るが如く、眺めることを樂しむ。その點からいつて、日本の庭園は靜的自然的表徴であつて、動的な人間的表徴でない。かゝる庭園の中に四季の移りゆく風物を眺めながら、何心なく、それと一つ心になつて行く所に、自然美を味ふ。庭園の中には小さな亭が設けられてある。庭を散策するものの休み場所であるが、同時に靜に景

を鑑賞する場所である。また凝つた庭には茶室がある。前にも述べたが、あか抜けのした小さな建物で、樹木の間に見えかくれげに設けられて、自然を壓しないやうに、自然と調和するやうに出來てゐる。その中に靜に坐し靜に語り、茶をすすつて俳句をつくり、或は歌をよむ。その談ずる所は、皆かかる趣味に關することである。その茶室には必ず名畫がかけてある。大概自然に關するものである。大體に於て日本の繪畫には、山川草木や花鳥など自然に關するものが多い。昔は、佛畫も行はれたが、これは佛敎の影響である。德川時代には浮世繪の中には旅人・遊女等・人物畫も立派なものが描かれるに至つたが、それは床の間にはかけられなかつた。床の間にかけられるものは、自然の風景に關するものが多い。人物畫であつても、その人物は極めてクラシックなもので、自然の中に自然の一要素として描き添へられたものである。

自然を好愛し、自然のまゝに見える庭園を作ることを樂しみとする心は、箱庭と稱して、小さな箱の中に自然の風景を模造し、或は小鉢に草花を植ゑて、それを椽先にならべ、家の中で自然の美を味はうとする心となる。殊にかゝる草木の取扱ひについて、有名なものは盆栽である。自然に放任すれば幾丈にも高く育つて行く木を、極めて小さい姿で小鉢の中に生かしておく。或は松或は楓或は梅、その他種々の樹木が、一尺四方位の小さな鉢に植ゑられて、その木振りは恰も幾百年の齡を數へてゐるやうに見える。大きいものでも四尺以上に上るものは少く、大概二尺位の高さに止められて、しかもそれが老樹大木の如く見えるやうに育てられる。これが栽培法については、專門家の知識を要する所であるが、一面から觀察すると、日本の氣候が濕氣に富んでゐるので、小さい面積の土の中に、多分の水分を保存することが出來るからだといはれるが、他面にはまた、日本人のまめな器用な手先の働きにもよると共に、自然を愛し、その自然を出來るだけ周圍に近づけて家の中でも眺めたい、といふ要求のしからしめるところであらう。我が國には緣日といふものがあつて、毎月定日をきめて、或る街の兩側に臨時に作られた小店が竝ぶ。そこには必ず盆栽が陳列されて、そぞろ歩きの人々の鑑賞に任せてそれを賣つてゐる。これも日本の夏の夕べの町の特色であらう。ホテルや飲食店の至る所に、盆栽が飾られてゐないことのないのは、外國人も認めることであらう。かくの如きは、日本人の自然を好愛する生活の一特質を示すに足ることである。

また春、草花の若苗の生える頃には、街に歌ふやうな聲を出して、それを賣つて歩く行商があり、秋立つ頃には、鈴虫・松虫・くつわ虫など、町に虫賣る商人もある。初秋には、軒先に虫籠をつるしてゐる家も多く見受けるが、一體我が國には虫が多い。田舍ばかりではない。都の家の

小さな庭先きにも、ちぢにすだく虫の音がきこえる。秋漸くたけてゆく頃、何となく秋の氣配を身にしみて行く夕暮に、ここかしこにすみ行く虫の音をきくと、何となく自然の心がかなでられて深い内觀的のものを味ふ。かういふことは歐米人には乏しい心境ではないかと思ふ。それでもかういふことがある。私の知つてゐる青年米國人がアパートの二階に下宿してゐた時、鈴虫を飼つてゐた所が、下に間借りをしてゐた日本人が、夜鳴くのでやかましいから飼ふのをやめてくれと、宿の主人を介して申し込んだ。そこで青年米人は、日本人で、虫の音を可愛がらぬといふのは、可笑しくはないかと宿の主人に反問した。ところが、主人も其の通りと納得し、風流を知らぬとは心得がよろしくないといふので、そのまゝになり、相變らず虫の音を樂しんでゐたと聞いた。この米人なか〳〵日本的になつた譯である。

我が國は、人の知る如く、山嶽極めて多く全土の約六割を占めてゐる。從つて日本人は常に山に接し川に臨み、いたる所、各種各樣の樹木に蔽はれてゐる姿を見ずにはゐられない。即ち自然に接し自然と共に生活してゐるのが、我々の日常生活である。そしてかゝる山嶽多き土地であるに拘らず、日本人口の約半數は農業にたづさはつてゐる。もとより、海からも澤山の食料品を得るが、陸地からも澤山な生活資料を得ねばならない。そこで農法は前にのべた如く集約農法である。これには器用な手と自在な腰と勤勉努力とを要するが、また日本人の心的傾向として田畑を耕作しその野菜や穀物の成長するのを見て樂しむ性質がある。土を愛することは、日本人の昔からの性質である。夫婦・親子・男も女も共に野や畑にいそしんで働く有樣は、外國人が見ても、その土に親しみ植物を育てて行く生活を樂しんでゐるやうに思はれるであらう。そして、この土に親しみ土から出來るものを好み、家族共々に働くといふ農業生活を、昔から續けて來たといふことは、愛鄕心の基づく所であり、また愛國心の源泉である。即ちその家族的愛鄕心が、皇室を中心とする家族的愛國心と融合發展して、我が國民精神の統一を强固ならしめてゐることは疑ひない。しかし、あまりに愛鄕的であつたことは、半面に於ては、海外發展の心を振起せしむるに妨げであつたかも知れない。もとより海外に遠く出て働くことは好む所であるが、また故鄕へ歸りたがる傾向がある。德川氏の鎖國政策も、さういふ心持ちを利用したかも知れない。然し、今日の情勢は昔のまゝに止まることを許さないのは、いふまでもない。人口は增加し、外國との交際は繁くなり、世界の舞臺に廣く遠く活動せねばならないのは、自明のことである。ひとり農業生活のみを持續する事は到底許されない。また實に今日は、我が農民生活も餘裕のある樂しい生活といふことは出來ない情勢になつてゐる。それは生活樣式が段々商工業化されて來てゐるから

である。今後は、國内に於ける生活を充實せしむると共に、器用な手と藝術的な才能とをもつて、經濟的にも海外發展の道を講じなければならない。

以上、日本人の自然を好愛することにつき、また、それについての心の用ひ方につき、色々の場合を説明して來た。そして、實は藝術的な技巧を用ひながら、その仕上げに於ては、できるだけ人間臭くないやうに、技巧を使つたことの見えないやうにすることを主眼とすることを述べた。即ちあくまで自然のまゝにあるが如きを尊ぶので、そこに日本人の自然觀があり同時に人生觀がある。いひかへれば、わざとらしくない、ありのまゝな、落着きのある、素直な心持にて、物事をあらはし、行ひを示して行かうとするものである。それが自然主義的であるといふ意味である。これは古事記の昔から尊ばれた心構へである。

これについて、もう少し解釋をすゝめて、日本人の自然に對する態度を考察してみると、それは自然の姿或ひはその有樣の中に、我が思ひを入れて行くといふ事である。いひかへれば、自然の姿や有樣に、おのづと表徵されて來る、何か心理的なるものを見出さうとする態度である。いはゞ、自然の動きや姿に同情することである。藝術論に感情移入説なるものがある。そのやうに自然の對象に人間の情緒を移し入れて思ひみることである。更に進んでいへば、自然には心があり、それぞれの自然物は何かの心を表象してゐるが如く見えることである。我が國に於ける最も短い詩、即ち十七字の俳句は、必ず春夏秋冬の自然の時季を、その中に讀みこまねばならないことになつてゐる。季を示さぬ俳句はない。從つて必ず何か自然物が詠まれるのであるが、その自然物の中に感想・情緒が常に寄せられてゐる。即ち情景一如が俳句の精神といはれる。或る哲學者の説にも、事々物々は悉く暗示するといふ論があるが、その通り、我々の眼前に現はれる事々物々は、何かの想ひを示してゐるが如く、これを見る人の心に、或る感じをおこさせる。心理學的に説けば、その感じは、自分といふ人間が持つてゐるので、主觀的であり人間的であるが、それを自然の事物そのものが示してゐるが如くに思へば、客觀的である。そして客觀的な風景の中に、主觀的人間の感情を融かしこんで、何れともいへずに、渾一的に感ぜられるままに、詩趣を歌つてゐるのが、俳句である。いはゞ自然の物事にことよせて、我が思ひを語るものである。我がいふのでなく、物が語るが如くに俳句を作る。春の海のゆつたりと岸を打つ姿を述べて、その中に大きくゆつたりした心持を托し、或は高く聳える白峰の朝日に輝く姿を敍して、そこに氣高い清々しい心を浮ばせるといふやうな類である。即ち自然にことよせて人の思ひを語る。この態度は、自然主義的であり實在論的である。けれども單なる自然主義や單なる客觀的實在主義でな

く、その中には、多分に人間の情が讀みこまれ、融かしこまれてゐる。或る尼僧のうたつた有名な句に、「朝顔やつるべとられて貰ひ水」といふのがある。朝起きて水を汲まうとすると、井戸のつるべに、いつのまにか、若い朝顔の蔓が可愛い手のやうにつかまつてゐるので、それをもぎとるも、あはれと思ひ、隣に水を貰ひに行つたといふ意味の表現である。さういふ心持ちにまで聯想して來ると、その意味は極めて深長である。朝顔の姿をよむ尼僧の心のいかに優しく美しいものであるかも、わかる。そして、ここに自然と同化し自然に同情し、自然と共に生きる態度が、おのづとあらはれてゐる。また「古池や蛙とびこむ水の音」といふ俳句も、文字通り飜譯してみれば、まことにつまらぬことに思はれるが、古池といふ、へりには苔のむし、古い木の葉も水の面に浮ぶまゝの靜かな池の中に突然、一匹の蛙が飛込んで音を立て、あたりの靜寂を破つた。そしてそのことが、更に却つて一段と庭の靜けさと、その寂しさとを味はせる。そこに何ともいひあらはし難い人境一如の世界が感得される。かゝる意味に於て俳句は出來てゐる。景色をよみ自然の出來事を語る、その中に、その自然を通して浮び出る心を歌ふものである。即ち自然の事々物々の中に、或る心持の表現されてゐることを感ずる所に、俳句が成立つのである。かういふ態度は一種の汎心論的な態度といつてよい。いひかへれば、萬象の中に心を見るものである。

(六)　直覺的なること、想像的なること

この心理的特質は、既に器用であるとか、藝術的であるとか、いふ場合にも聯關してゐた事柄であるが、改めて、ここにこれが日本人の著しき特徴であることを認めたい。これを反面的にいへば、我々の心の用ひ方は、論理的でないといふことである。或は思辨的でないといふことである。他の言葉でいへば、分析的でなく合理的でないといふことである。この性質については、先に日本人の性質が自然主義的であるといつた場合にも觸れてゐたことである。事物を觀察するについても、これを分析的に合理的に了解しないで、そのまゝに、いはば全體的に直觀しようとする傾向があることである。いひかへれば、論理の過程を經ずして、直ちに實相の中核に觸れて行かうとする態度である。人の心を知るにも、その語る言葉に由るよりも、その態度が暗示する印象によつて、内に潜む心持を洞察しようとする。これをまた他の角度からいへば、理論的であるよりは實踐的であるといふことである。即ち理窟づめに概念的に了解しようとするよりは、實行に訴へて、事物の眞相を看破して行かうとする。更にいひかへれば、抽象的であるよりは具體的である。それであるから、論理學にいふ演繹的に三段論法の方式をとるとか、或は歸納的に數多く

の場合を觀察して、然る後に總括するとかいふのでない。直接に事物の眞相を捉へようとする。實にかゝる論理學は我が國では發達してゐなかつた。それはむしろ間だるい方法である。一體、これは東洋流の考へ方であり、心の用ひ方であると稱してよからう。西洋の書物にも、格言を集めたやうな表現の仕方もないではないが、大體に於ては、言葉を多く使ひ、理論的に論理的に物事を解釋し、分析的に抽象的に思想を述べようとつとめてゐる。然るに東洋流の考へ方は、老子の說や、孔子・孟子の書に見るが如く、いはば格言の集りのやうに述べられてゐる。思ひつくまに結論的な事が簡單に語られてゐるのであつて、その間に演繹的にも歸納的にも論理的方法は盡されてゐない。いはば直接推理といふか、途中の過程を拔いて、前提から斷定に飛んでゐる。從つて、その斷定の意義を會得しようとするには、それを論理的に分析的に取扱つたのでは、その目的を達することは難い。かく述べ、かく語る者の心に、我が思ひを入れ、態度を同じうすることによつて、納得する他はない。

勿論、かやうな直接推理的な、直覺的な斷定の眞理とされるやうなことも、後から、これを分析的に考察し、いかなる要素が、その中に含められてゐるか、その斷定を得るには、いかなる仲介的な論理を運ぶことが出來るか、などを考察することは可能であらう。いひかへれば直覺的眞理を得た時に、これを演繹的方法によつて組み立て直し、または歸納的手續きを、その間に挿んで考へ直すことも出來るであらう。それ故に、直覺的な方法と演繹的または歸納的な論理的方法とは必ずしも矛盾するものではないと思ふ。この意味に於て、一方を東洋思想と名づけ、他方を西洋思想と名づけるならば、兩者の間には互に特色はあつても、必ずしも矛盾撞着するものではないと思ふ。しかしながら、いかなる特徵を、それ〴〵の思想生活が有するかといへば、東洋人殊に日本人は、かゝる直覺的な性質を有してゐるといつてよい。しかし長所のある所、同時に短所の潛む所であることは、我々も自覺せねばならない。要するに、我々は長い面倒な論理的方法をつくして、しかる後に、物事を理解するよりは、一足飛びに全體的に結論的に、想像の翼を擴げて、物事の眞相を忖度しようとする。その意味に於て、日本人は早わかりのする暗示力に富んでゐる國民である。歷史的の敍述をする書物は別であるが、その他の著作、殊に人生の問題に關する著述の多くは、かゝる直覺的斷定の連續のやうな形に於て述べてゐる。この心理作用の勝れてゐることは特徵であり長所であるとしても、その代りに論理的・數理的な考へ方や取り扱ひに長じてゐない傾きがあるので、精密科學の如きは、東洋に於て遺憾ながら發達してゐなかつた。外國人の日本人評を見ても、論理的思考力に缺けてゐるといふ言葉が、しば〴〵あるが、我々は無下

にこれを否定しかねる。少くとも明治維新以前の文化史を見れば、多少の取りわけはあるが、大體に於て、理智的に冷靜に、論理的乃至數理的な取扱ひを、自然現象についても人文現象についても、行つてゐるといふ事柄の乏しかつたことは、否定出來ない。しかし明治以後に於ては、我が短を補ふために歐米の長をとることにつとめ、今日に於ては各種の西洋流の學問も我が國に發達してゐるので、我が國民の論理的・數理的才能も著しく敎養され、啓發されて來てゐる。しかし、ただ本來の心理的特質はいづこにあつたか、またあるかといへば、直覺的なる所にあるといへる。さきに日本人は「骨」で物を覺えるとか、「勘」で氣付く特質をもつてゐるといつたのも、この直覺力を意味する。

直覺的方法とは、今いつたやうに、或る斷定乃至決論に達するについて、かの論理的な思考方法のやうに、はつきり、くつきりと、觀念の連鎖を傳はつて行くのではない。といつて全く觀念の聯想作用がなかつたならば、前提から斷案に達することもできない。それ故に、三段論法式な思考法でない直觀法に於ても、これが一種の判斷である以上、何か觀念の移り行きはあるに相違ない。けれども、それはその一々の推移の段階の姿を示し得ないやうに、早く働き、そこに情的に一種の本當らしいとか、嘘らしいとかいふ感じを起しつゝ、何となく本當らしいと思はれるところに、斷案が結ばれる。從つて直覺法は、もし、これを一種の論理と名づくるならば、感じによる論理である。或は感受性の論理、または同情の論理といつてもよい。これまでの經驗を傳はつて、電氣が電線を通ずるが如く、一足飛に結論的なる所に通達し、そこに全體としての感じを起して、斷案を生ぜしむる。我々日本人を感受性に富んだ國民といふ者もあるが、この直觀力はこれを示してゐるといつてよい。論理的な手續きを經ずして何となく、しかじかであるといふやうな考へを抱かしむるのは、敏感であり、感受性に富むからである。

かかる直覺的斷定は、これをくだいて分解的に見れば、論理學者が註文するやうな方式に作り直す事は出來ないのではないから、直覺的方法と論理的方法とは撞着するものではないことは、今述べた如くである。從つて、完全といふことを人に期するならば、一面に於ては、鋭敏なる直覺力を有することが大切であると同時に、他面に於ては、分解的に、はつきり、くつきりと觀念の連鎖を吟味し得る論理的頭腦の優れてゐることも、大いに心要である。感受性に富み直覺力のある人は、長い論理の手續きを要せずに、直ちに結論に達し得る長所をもつてゐるが、しかし、時々大いなる誤認をなすことがある。早呑み込みとか輕率とかいふことにもなる。反省考慮を缺くためである。大いに早く適中する事もあるが、しからざることもあるので、ひとり直覺の能力

を自慢することは、大なる危險に遭遇し得る機會がある。故に、かうであらうと直覺的に思ひついた斷案についても、靜かにこれを再吟味する心掛を要する。即ち論理的に嚴密に追及する必要がある。しかしまた、單に論理的な分析的な能力が發達してゐるとしても、何か豫め見當をつけ得る直觀的能力がなければ、その論理的な能力も大なる働きを示すことは出來ない。結局、下らない事をただ理窟づけてみるといふ始末になる。いはば、氣が利かない、的外れの理窟屋たらざるを得ない。であるから、論理的な思考の伴はない直覺が危險であると同時に、直覺のない論理的な思考は、くだらないものになる。この點に顧みて、何れの能力に長じてゐる者も、共に相戒めねばならない。他言を以てすれば、問題の提出は、直覺の力によらねばならない。しかし、これを吟味するのは論理的な能力によるのでなければならない。さういふ意味からいつても、東西のそれ〴〵の文化的國民は、それ〴〵の長所を維持し、その短所を反面的に補ふことにより、更により多くその長所を發揮することが出來ようと思ふ。いふまでもないことであるが、西洋に於ても大なる發明家・發見家といはれる人には、論理的な思辨に長ずると同時に、偉大なる直覺力を有し、盛なる具體的な想像力とを有してゐた。林檎の落つるのを見て引力作用に氣づいたといふニユートンの直觀力、鐵瓶の蓋を持上げる蒸氣の力を見て、蒸氣機關に思ひついたといふワツトの具體的想像力、さては「我れ考ふ、それ故に我あり」といつたデカルトの直接推理も、長々と考へた末とはいひながら、一種の直覺的斷言に他ならない。近代の世界的發明家エヂソンには、驚くべきかゝる直覺力があつたに相違ない。

東洋人乃至日本人が直覺的であるといふ性質を明らかにするために、も少し直覺的なることと論理的なることとの異同を述べたい。兩作用が觀念の聯想を要することは同樣であるが、論理的思考の場合に於ては、論理的法則に從つて一つの觀念より他の觀念へと、一足づゝ注意深く運ばれて行く。しかし、その取扱はれる觀念は抽象的・一般的なものであつて、特殊的・具體的なものではない。然るに直覺の場合には、概念的に思考されないから、觀念から觀念への推移が一般的に法則的に行はれない。特殊な具體的事實から、それを通し、それを越えて、一足飛に結論する。その結果はまだ現はれてゐない、來るべき事實をいひ當てることでもあるが、また一般的眞理を語ることでもある。後者の場合に於ては、一事一物の中に、それを通じて一切の道理を見んとするものである。即ち特殊の中に普遍を見んとするものである。それ故に、直覺的論斷は極めて大膽な態度である。從つて他の論理的態度の如く、注意深くないのであるから、時に輕率な判斷に陷る危險はある。とにかく、かういふ直覺的な態度に東洋人乃至日本人の特質が存する。

今、直覺的といふことは、聯想の糸を素早くたどり、いはば一足跳びに結論に達するといつたが、この聯想的に心を運ぶといふことは、我々日本人の心理的特質であつて、これに對して、西洋人の心理的特質を語れば、對照的に物を考へるといひ得ると思ふ。西洋人と話合つてゐる時、しばしば感ずることは彼等は、何か一つの注意すべき事柄を考へると、すぐそれに反對するやうな現象を思ひ浮べて、道理を考へて行くことである。然るに我々は何か特記すべき事物に接すると、それに類似するやうなことがらへとぶやうに思ひを走らせて行く。即ちそれからそれへと聯想して、何かそれに似たやうなことが起りはせぬかと思ひ浮べて行く。この點に於て氣は早く一圖に動いて行く。いはば、氣の利くところは素早い。しかし、思慮簡單といふやうな所もある。いはゆる複雜怪奇でない。我々は言葉の上で駄じやれをいふことが多いが、これは皆發音上の聯想である。また「あだちが原におく霜の一足毎に消えて行く」といふ風に、敍事敍情をこめた道行き文には、觀念の聯想を巧みに傳はつて美しく述べられてゐるものが澤山にあるが、足引の山鳥の尾の長々し夜をといふやうな枕言葉なども、聯想性の特徴を示すものである。

これは印度に起つた論法であるが、因明といふのがある。演繹法と歸納法をまぜたやうな論法であるが、そこに直覺的な判斷といはるべき有樣が看取される。それに從ふと先づ斷案して、「山に火がある」といふ。「何となれば、煙があるからである」「例へば竈のやうなもので、火のある所に煙がたつからである」といふやうに論ずる。これは一つの實例に照らして比喩的に論斷するもので、一種の歸納法の如くでもあるが、論理的に注意深く推論されるよりは、大膽に斷案してゐる觀がある。そして一つの具體的な實例によつて、直ちに眞理を語らうとする態度がある。さういふ論法は東洋人の考へ方の特色であつて、分析的に抽象化して論ずるよりは、具體的な實例を掲げ、その實例の力を通じて眞理を直覺しようとする。禪といふ宗教哲學思想については、東洋殊に支那・日本を通じての思想的特質として、屢ゝ紹介されてゐることであるが、禪の問答の如きは、全く謎を語り合ふやうなものである。論理的な方法を用ひずに、具體的な例を掲げて、直ちにそこに全體的の眞理を示さうとつとめる。禪の教義の起りは、釋迦が、晩年に大衆を招いて何か教説する所があるかと思つたのに、一片の花を手にとつて、これを大衆に示しつゝ、ただ微笑してゐるだけであつた。大衆は、それを見て何の事か了解出來ない。即ち、直覺出來なかつた。然るに迦葉尊者といふ長老の弟子が、いつもは難かしい顏付なのに、その時、につこと笑つた、といふので、釋迦が、その人を以て、眞に佛道に悟入した者であるとして、これを賞めた。といふ話がある。これを以心傳心或は直指人心といふ。拈花微笑する釋迦の具體的な有樣を介し

て、即ち特殊の事柄を介して、普遍的な眞理を悟つたのであり、直覺したのである。禪宗には、悟りといふ言葉が殊に重んぜられるが、それは何かの具體的な體驗から、徹底的な眞理に思ひ當ることである。大悟徹底するには、色々と考へねばならぬことは、いふまでもないが、それは、論理的な過程を辿るのではなく、色々の體驗を思ひ浮べて、心の持ち方を工夫し、最後に一切のわだかまりが、雲の消えるやうに、ほどけ去つた心境に入るをいふ。とにかく、實例的に色々の場合を思ひつゝ、それを通して普遍的な眞理のおもかげを會得しようとする。この點に於ては、なほ詩や歌の構想の如くでもある。詩歌は論理的なものではない。自然を歌ひ人事を詠じても、それは具體的な現象を述べることによつて、そこに隱れ潛んでゐる眞理を言外に表現しようとするものである。詩や歌に述べてある心持は、これを同情的に直感する他はない。一體、東洋に於ては論理的なものと直觀的なものとが、はつきりと區別されずに融合してゐる觀がある。その點は、非論理的であるといふ缺點もあるが、またそこに藝術的な直觀的な味もある。人生を論ずるについても、例へば、人生は朝露の如しといふやうな具體的な喩で、人生觀を述べ、川の瀨が淵となり、淵が瀨となるといふ比喩で世の中の無情が語られることもある。勿論かくの如きは、つまらぬ喩へといつてもよいが、その喩の中に、或る深きものを感じて行かうといふ心の用ひ方に、我々の特質がある。

直覺を重んじ體驗を尊ぶ日本人には、西洋流の教授法は行はれなかつた。尤も古くから學校教育は行はれ、主に儒學が教へられたが、專ら學生の自力を養ふことによつて教へられた。教師は講義もしたが、主に學生をして輪讀せしめた。讀書百遍意自ら通ずといはれるやうに、學生は度々讀んで自ら工夫して、その眞意義を發見しなければならなかつた。今日のやうに、教授法などは殆んど問題とされず、教師は自己の感得した所を率直に語るだけであり、學生はそれに暗示を得て自ら考へて了得する外はなかつた。いはゆる教授法は、心理的に分析的なものであり、理論的に方法的なものであるが、抽象論理を重んじないところには、その方法が考究されず、使用されなかつたのは、當然のことである。なほ更、實際の技術を教へるなどの場合には、全く方法的な教授は試みられなかつた。弟子達は、師匠のやる所を見習つて、自ら實行してみる外はなかつた。刀匠の弟子は、師匠には叱られるだけで、泣きながら自ら鍛錬工夫して、湯加減や打ち加減を悟る外はなかつた。即ち刀を作る「骨」を直覺する外はなかつた。これは極めて科學的知識を要することであるが、いはゆる科學的に計數的に理論的には少しも教へられなかつた。ただ體驗し直覺し了得する外にないのであつた。外國の話であるが、昔イングランドに染料の調合の極め

て巧みな人があるので、スコツトランドでその人を招聘し、その技術を習はうとしたところが、本人は掌に染料を竝べて手加減で調合してやつて見せるだけで、これを方法的に理論的に計量し得るやうに說明することはできなかつたので、何の役にも立たなかつたといふ話もある。これも直覺力を主とするものは、惡しき敎授者なることを語るもので、日本には、これが多かつた。

禪宗は直覺悟入を尊ぶものであるが、それには禪房に入つて坐禪を組み、師に與へられた考案について大いに思ひを練らなければならない。しかし、その間に何等の敎授法はない。一度考案について解答を得たと思ひ、師に向つてそれを語れば、師は然りといひ、否といひ放つだけである。場合によつては痛棒を喰はされるといふ。否といはるれば、再び入禪して考慮にふけり、更に答を述べて更に否認さるれば、更に入禪して冥想し、免許を得るまで、幾度となく徹底的に獨り考へ獨り發明する外はない。何故に弟子に敎ゆることはしないかといへば、それは却つて惡しき敎授法で、眞個に實力に由つて直觀し悟入し得たものではないからだといふ。今日の良く敎へる敎授法は、禪道にとつては最も惡しき敎授法である。故に體驗直覺を重んずる所には、いはゆる敎授法は發達しない。それだけ知識の普及は後れるが、それだけ、具體的な實踐的な堅實な知識が修得される譯である。

さて、この直覺的といふ性質は、具體的な想像的な能力と、早い聯想力とに長けてゐることを意味してゐる。西洋畫と日本畫とを比較すると、大體に於て西洋畫は寫眞的で、綿密に事實に違はぬやうに描かれてゐる。日本畫にも、極めて寫實的なるものもあるが、大體に於て、いはゆる想像畫である。實物の鳥や花を描いても、或る特徵を示すことによつて、他は想像に補はせてある。かの浮世繪の如きは、或る點からいへば、寫實的であるが、その景色人物の中には、多くの想像を殘すところが澤山ある。そして昔から傳はつてゐる山水畫の如きは、到底寫實的と見ることは出來ない。却つて豐な想像を起させて、人の眼を樂しましむるところがある。見え隱れする山や海や舟や橋などは、見ても見飽きぬ風景である。一口に、見飽きのする繪と、見飽きのせぬ繪とが區別されて、見飽かぬ繪こそ、良い繪といはれるが、それは、色々の場面を想像せしめ直觀せしめて、心ゆくばかりの感興を起さしむるからである。實際の山川の風景を見ても、我が國では雲の行き交ひが忙しく、霧や霞の立ちのぼる折りが多く、もやの薄くかゝつた山村の景色などは、まことに見事なものである。實際の風景が、かやうであるが如く、これを寫した繪も、それに似通つて描かれ、實際上にも、繪の上にも、想像を逞しうするに適してゐる。かく想像を用ひて、あつさりとした描寫の中にも、潛んでゐる色々の場面を直觀せしめようとすることは、庭園

の場合でも、盆栽・活花の場合でも、さうである。皆、想像を逞くさせる餘地を存してゐる。世間の諺に、夜目・遠目・笠の中といふことがあるが、これは婦人についての美を語つたものである。明るい晝に見るよりは夜の薄い光にうつされる方が美しく、目のあたり近く接するよりは、遠くで眺める方が美しく、むき出しに見えるよりは、笠の中に面影が少しく見える方が遙かに美しいといふのであつて、何れも想像の餘地ある所に、美を見んとするものである。日本婦人の着物の飾り方が、正面よりは、却つて後の帶の結びにあらはれてゐる如く、日本髪の飾り道具が、横や後から、より美しく眺められるやうに出來てゐるのも、想像化を味はふといふ態度を語るものである。

論理的に事細かに語り論じない心は、言外に忖度し想像する力を示してゐる。それは、日本人の相互の挨拶の言葉の中にも窺はれる。外國人に於ては、イエスとノーとはつきりしてゐる。はつきりせずには承知しない。然るに日本人はイエス・ノーを日本語に於て、あまりはつきりさせない。といつて、全然心があいまいといふわけではない。ただ、あまり、はつきりイエス・ノーをいふことは、相手に強くひゞいて、失禮であるかとも考へ、また、はつきり、言葉にイエス・ノーをいはなくても、大概は互に推察し得られると思ふからである。時々、外國人の日本人評をみると、日本人は當てにならないとか、信用が出來ないとか、嘘をつくとかいふことが述べてあるが、勿論、嘘をつく人が一人もないわけではない。然し、外國人と心理的態度が違ふので、何となくあいまいで、ずるいやうに思はれるのかも知れない。更に例を掲げて考察して見たい。甲が乙に向つて、「これから一緒に御飯を食べようではありませんか」といふ。乙は、外國人ならば、「はい、承知しました」とか、「いゝえ今日は御免蒙ります」とか、はつきり言葉で語るであらう。然るに日本人、特に商人肌の人は「へえ（はいの訛）有難うございます」といふ。その「へえ」または「はい」とは必ずしも然りといふ意志決定を示した言葉ではない。ただ貴意を了解した、といふやうな意味である。そこで甲が重ねて「いかがです、一緒に行きませんか」と更に決心を問ふ。すると、また、乙は御辭儀をしながら「へえ有難うございます」と同じやうなことをいふ。容易にイエス・ノーの意志を明かに語らず、「へえ」といふあいまいな言葉を使ふ。しかし、その時のいひ方や語氣によつて、乙が同意してゐるのであるか、行きたくないのであるか、といふことは、大概忖度できる。そこで甲は乙が行きたくないといふ心持ちを推察して「では、この次にしませうか」といへば、乙はそれを受けて「どうかこの次に」といつて、そこで話はまとまる。また、甲は乙の意志あることを見拔いて、「どこどこの料理屋へ行きませう」といへば、

乙は「では御一緒に願ひませう」といつて事はまとまる。日本人のすべてが、かうだとはいへない。しかし、昔からの習慣的態度を見ると、日本語の「へい」または「はい」といふ言葉は、或る場合にはイエスとなり、或る場合にはノーをも意味する曖昧な言葉である。これは、言語には明確にあらはさずとも、人の心は推量出來るではないか、言外の意志は直觀出來るではないか、といふ心の働きのあることが、お互に承知されてゐるからのことである。前に述べたが、自分の結婚のことを、親や仲介人に御預けにする若い人々、殊に女性は、容易く西洋式のイエス・ノーはいはずに、ただ「はい」といふ。その心持は、可か否か、推察出來るであらうといふ思はせ振りである。

なほ言葉のいひ表はし方には、日本語特有のものがある。何か自分が用があつて、幾人かの共同の仕事の場面から中坐する必要のある時に、他の人に向つて「よろしく賴む」といふ。理論的にみれば「よろしく賴む」とは、何事かわからない。「勝手にしろ」といふことのやうでもあるが、さうでもない。やはりその人の考へを尊重しながら、事を適當に裁け、といふ意味である。ところが、言葉に内容は少しも示されてゐない。それでも、その言葉をきいたものは「はい承知しました」と納得する。これも言葉の上からは何を承知したかわからない。しかし、それらの言葉の取り交しだけで、その仕事は滯りなく運ばれる。これは卽ち言外に想像・忖度・直觀の力の働いてゐることを示す。要するに言葉の意味だけでなく、その言葉を語る時の語り方や、その身ぶり、その表情を見て、その人がいかなる考へであり、心持であるかを見拔かうとする態度がある。昔から、言あげせぬ民といはれてゐるが、言語による論理に本づかず、具體的に物事の眞相をつかんで行かうとする直觀的態度が、日本人の實際生活に行はれて來てゐたことを物語る。「いはぬは、いふにいやまさる」といふ諺もあるが、言葉だけが人の心でなく、一切の人の動きのあらはれが、人の心を示すものとすれば、「目は口程にものをいふ」ともいはれるが如く、具體的に實踐的に眞理を提へようとするのは、當然なことである。

なほ附け加へておきたいことは、直覺的に物事の眞相をつかむといふことは、他の語を以てすれば、同情による理解と稱してよい。先に、直覺法は一種の感じによる論理と名づけたが、感じとは、見られる對象物に思ひをよせて、その本質に共感することである。前に俳句について述べたが、それは自然の姿が或る心持を現はしてゐるものの如く感じ、我と物と、情と景とが一つになり、その景を語りつゝ、つまりは我が心をも同時に述べてゐるのだといつた。これは自然の心を簡單な詩的な形式で直覺するものである。天地萬象は悉く有情とみて、その姿に思を托し、同感

する事によつて、物我一體、情景一致の境を語る。それ故に、これは同情による理解と稱してよい。そして、この心持は、日本文學を通ずる思想的特色をなしてゐる。奈良・平安朝時代の文學にあらはれた日本人の思想的特質は、「あはれ」を感じ、「あはれ」をうたふことであるとされてゐる。「あはれ」とは文字的に解釋すれば、感動を表はした言葉であるが、その感動は、同時に對象物に思ひを移し、その內面性に同情する意味に於て、いひ知れぬ奧床しい感情の動きを味ふことを意味する。春夏秋冬の移り變りを見て、そこに天地の心のうつりゆく姿と、人の世の有爲轉變の餘儀なきを直觀し、或は花の咲き落つるを見、或は鳥の木の間になく聲のほがらかなる、または、かなしきを聽いては、何とはなしに、自然と人生との間に共通する、或る大きな心の動いてゐるのを感ずるやうなことを、「あはれ」といふ。或は虫の音にも自然の心をきき、それを歌にも俳句にも讀む。鐘は人の作る所であるが、その鐘の音にも「あはれ」を感じ、いひ知れぬ思ひを味ふ。「花ぐもり、鐘は上野か淺草か」といふのは、のどかな春景色のゆつたりとふくらみのあり、おちこちとひびく音のなごりに、何となく春の名殘り惜しさに心のまどふやうな興趣をも語る。殊に除夜に鳴りわたる鐘の音の餘韻は、人の世のなごりを惜しむ聲ともきこえて、一しほの冥想を呼び起す。梵鐘は長く餘韻を殘すが、我々の想像を誘ひ、音の心を讀まうとせしむる。

これ皆「あはれ」の心持ちである。この心持ちの中には、人生の無常を感ずるといふ佛敎の宗敎思想の影響もある。また、その後の文學思想では、幽玄といふことが語られるが、幽玄とは文字上からいへば、かすかで奧深いといふ意味である。要するに、論理的に分析的にはいへぬ、或る種の感じを指すのである。物の表面にあらはれてゐず、奧に宿る何か深い遠いものを、かすかに偲ぼうとする心である。しかも、それは、もとより抽象的には語れない。そこで、それを表はすには、具體的な事物に事寄せて、それから聯想的に直覺的に、同情同感的に會得する外はないことである。また「さび」といふことが日本人の思想的特質といはれるが、その「さび」とは、物がきらびやかでなく、古くしてさびがつき、苔がむすといふやうな意味である。表面的には、もの〳〵しきところなく、輝きのないものであるが、その內奧には、何ものか貴いものが深く隱れ潛んでゐることを意味する。それを自然についていへば、古くして人目にふれない池のやうなもので、そこには深い靜寂の味をもつてゐるやうなものである。これは外觀ではわからない、內觀して直覺しなければ、氣づかれない境地である。また「澁い」といふのも、一つの趣味をあらはす言葉であるが、それは味の澁いといふのと同じ意味である。いはゆる「甘い」のとはちがふ。甘いといふのは、通俗で薄つぺらで、含蓄味がないといふことである。それに反して「澁い」とは、何

とも一寸いひあらはせぬ心の味をいふ。いはく、いひがたきところに妙味があるとするものである。目立たない、表立たない、ぎよう〳〵しくない、靜かな落着いた心的態度を表現する。それであるから、この澁い味を會得するにも、表面的に見ることはできないから、直覺的に同感同情して、その境地を味はふ他はない。人間の修養についていへば、落着いた悟入した心境は、論理的にいひ表はせない內面的な深みを持つてゐる。それに達するにも、それを語るにも、論理的方法によることは出來ないから、體驗的に錬磨して、直覺的に人生の眞相をつかむ外はない。これは東洋人殊に日本人の思想態度に現はれた心理的特質といへる。そしてこの問題は、やがて次の問題と離るべからざる關係をもつてゐる。

(七) 含蓄的・內包的で、控へ目で、自制的なること

この心理的特質は、從來述べて來た諸特質、特に前節の末尾に述べた性質に關係のあることである。要するに、種々の說明は、我々日本人の心理的特質を、色々な角度から眺めて語るに過ぎない。この特質を他の語をもつていへば、自己發表的でなく、外延的でないといふことである。しかしこれは、心理的性質と、簡單に名づけるよりも、更に道德的修養を含めた文化生活上の特質といふ方が適當かも知れない。卽ち自然に與へられた性質といふよりも、道德的に修養の結果に於て、段々國民的性質として形成されて來た心的性質といつてよい。この問題に關しては、先に日本人は自然を好愛し、自然主義的態度をもつといつたが、その自然主義的といふのは、修養的な文化生活を伴はぬ、むき出しの自然的といふのではなかつた。一見して、わざとらしくなく、自然にあるがまゝに見え、自然に行はるゝが如く行ふが故に、自然的であるとはいふものの、實は人智を盡し、人意を加へ、苦心の結果に於て、かゝる自然的な姿を示したのである。卽ち、人智・人爲を盡してはゐるが、それをあらはに發表せずに、人力の跡の見えないやうに、控へ目にしてゐる所に特質がある。もし苦心の跡を表はすとしても、それは直接的でなく、間接的に、おのづから人をして忖度推察せしむる所に、興味を感ずる。もとより人間の精神的活動を示すことを希望せぬわけではない。文化なるものは人の精神力の創造であるから、いかやうにか、これをあらはさないではおけないが、日本人の心構へとしては、それを、はつきり、露骨に、詳細にあらはさうとするのでなく、人をして、おのづから悟らしめ味はしめるやうに、想像的鑑賞の餘地を存しておく。思想についていへば、すべてをいひ盡さずに餘韻を殘して、他をして、これを想像せしめ、補はしめて、悟らしめようとする。いはゞ、人の心に我が思ひを托するものである。

從つて人の想像力、直覺力を豫想してゐるわけであつて、考へる者、行ふ者としては、控へ目に餘地をのこして、他者の忖度に任せる。かやうに自己を十分に發表しないといふことは、西洋の格言に、事毎にその最善を盡せ、といふ敎へとは、頗る相反するやうにも考へられる。しかし、この態度は、中途半端の宜い加減の心持でをり、宜い加減にごまかしておけ、といふのではない。外人は、日本人のかういふ態度を見て、或は齒がゆく、物足らぬやうに感ずるかも知れない。けれども、實際上、日本人はその思ふ所において、中途半端に思ひ、行ふ所に於て、いゝ加減に行ふものではない。決意して十分に行ふことは西洋の格言通り、最善を盡すのであるが、しかも、その間に於ても、なほ一歩の餘裕を存し得るやうに最善をつくす。これは、自分の行動にとつての心構へであるが、それと同時に、他人に對しては、自己を露骨に發表して、他人の心をあまりに刺戟しないやうにと、他者の心を尊重して、控へ目の態度をとる。「私」といふ第一人稱を多く使はないのも、それである。しかし、かやうに平常は、萬事を控へ目にしてゐることは、いざといふ場合には、更により多くの力を出し得る心構へである。要するに、自己發表的でない。外に自分の力を殘らずあらはし示さず、內面的に自分の心を締め括りつゝ、控へ目に或は語り或は行ふことは、その人物に、品位を備へしめ奧床しい風格をあらはさしめる。日本婦人の修養は、さういふ內面的な心構へに基づくと同時に、武士道の修養も、また克己的な自制的な鍛錬生活の心構へに存する。

我々日本人は、心理學的に、その生れつきの心理的性質を觀察すると、必ずしも自制的な控へ目的な性質でないかも知れない。かなり本能的・衝動的な意味に於て、自然的な性質を多分にもつてゐるとも觀察される。しかし、これは人間である以上、どこの國民にも存することでもあらう。そして原始時代の民族の生活は、どこの國でも、さういふ心的性質が見える。我が民族の昔を語る古事記を見ても、日本人は、その本能的な解放的な人情をあらはすのに、いかにも自然的であつたやうにも觀察される。天照大神が、天の岩戸に御隱れになり天地が暗くなつた時に、その前で八百萬の男神・女神が唄ひ踊り騷ぎ、內で何事の興樂かと思召されて、大神が岩戸を細目にあけられたのを、これ幸ひと、神々が寄つてたかつて、戸を押し開けて、天地が再び明るくなるやうに、大神を誘ひ出し申し上げたといふ。この神話は、いかにも快活な氣象が、日本人の自然的性質のやうに察せられる。たしかに現代の我々も、さういふ快活さを持つことは事實である。しかし他面、修養上の心得からいへば、自然的に奔放ならんとする氣性を自ら克制し、控へ目にするやうに努めて來た。こゝに心理的生活の二重性があると解してもよい。とにかく、文化

人としての修養においては、露骨に自己を表面にあらはさず、餘韻を殘して、人に何となく悟らせるやうに、卽ち自分の心を他人にお預けするやうに行ふ。ここに信愛と優美とがある。

いかにして、かやうに本能的・衝動的な心理的性質を持つてゐると見られる日本人が、自制的な控へ目の含蓄的な心の持ち方、生活の仕方をなすに至つたかについては、色々の原因理由もあるであらう。それについては、古代からの我が文化を考察すると、佛敎や儒敎の思想的影響の多分にあつたことは疑はれない。佛敎が慾に耽ける生活を不可とし、また儒敎が情慾に囚はれることを不善とした敎への如きは、克己、自制の必要なることが、段々日本人の修養生活の中に、深く植ゑつけられて來たことと察せられる。また多年、武家時代を過して來た日本人は、その時代に必要なる武士氣質の嚴格なる生活訓練を遂げて來、且つ段々と士・農・工・商といふ如き階級制度が建てられたので、國民生活を圓滑ならしむるには、自然的な本能的・衝動生活を恣にすることが出來がたくなるのは、勿論である。また、昔からの家族生活は、段々民族の發展と共に、社會的に制度化されて來て、小さい意味でも大きい意味でも、家族の各員が、自己を制して圓滑に、調和的に生活しなければならないのであるから、そこに長き家族主義的文化生活の結果として、自己本位的でない、自己發表的でない、克己的な控へ目の生活態度が敎養されて來たものと考へられる。家族主義的の生活態度が、婦人の敎養といかに關係あるか、またそれが子弟の敎育の間に、從つて國民一般の生活の間に、いかに深い關係があるかは、旣に述べた。

なほ他面から考察すると、我が國土は南北に長く伸び、山嶽は頗る多く、四季の氣候の變化は著しく、從つて寒暑の交替が甚だしい。それ故に單に自然物にたよつて、何等の用心なしに、卽ち生活上の控へ目なしに、その日暮しをすることは出來ないからであるとも解釋される。太古の我々の祖先が、九州の溫い南端に住んでゐた當時に於ては、いはゆる自然的生活も出來たであらうが、だん〳〵氣候の變化著しい本土に發展して住むに至ると、その生活態度に、その日暮しでない、用心深い控へ目の生活方法が考慮されなければならない。なほ且つ島國で、耕作地が狹い割合に、人口は段々と飽和點に達して來たので、一層用心深い生活をせねばならなかつた譯である。近頃こそは商工業も大いに發展し、從つて人口も非常に增して來たが、德川の鎖國時代に於ては殖えんとする人口も殖えかねてゐた。おのづから產兒制限も行はれたやうであるが、僧侶や尼となつて獨身生活を送つたものも多かつた。さういふ事情に於ては、集約農業の法をとつて、小さな土地から澤山の生產を得るやうにつとめねばならない。こゝに勤勉の風も養はれ、節約貯蓄して控へ目にする生活態度も實行されて來た。農家には多くの家に穀倉や味噌醬油倉がある。

また、物持ちの家には文庫倉といふものがあつて、中には昔からの澤山の家財・道具が藏つてある。卽ち生活は外延的に擴がることは出來ないから、內包的に工夫する他はなかつた。德川初代將軍・家康は「過ぎたるは及ばざるが如し」とか「足らざるに甘んづることが大切である」とか「物事は氣長に落着いて考へよ」とかいふ意味の敎訓を述べてゐるが、かゝる鎖國時代に於ては、當然の生活方針であつたとうなづかれる。とにかく日本人の生活は、物的生活に於ても精神生活においても、外に多くを示さず、內に多くを貯へ、常に餘地を有するといふ心構へであり、生活態度である。こゝに我々の文化生活の一特質を伺ふことが出來る。

外國人は日本人を評して遠慮勝ちで口數が少いといふ。これは、その動作を人の諒察に任せておくといふ含蓄味のあることである。殊に日本婦人は、その點に於ては特徵を示し、西洋婦人と異つて、思ふまゝに話し、動作することを好まない。しかし、日本婦人とて話しの嫌なわけではない。「女三人寄れば姦しい」といふ句もある通り、友達同志の婦人が集ると、かなり賑かにしやべる。しかし、少し表立つた知らない人も交じる社交生活になると、禮儀として、あまり多くをしやべらないこと、行ひ方も極く靜かにしとやかにすることを、立て前としてゐる。高笑ひなどは下品なこととされてゐる。昔からの習慣によると、食事の場合にも、成るべく話はせずに、早く食べてしまふことが、禮儀として重んぜられてゐる。しかし近頃は西洋流の習慣も加り、衞生的にも考へて、早く食べ終ることがよいとはされずに、話しながら食事をするやうに、だん〳〵習慣づけられて來てゐるが、從來は、その際のおしやべりは禁物とされた。食事の時ばかりに限らず、一般に社交上、自分ひとり多く語り、自分の思ふことを遠慮會釋もなく發表することは、愼むべきこととされた。それは、人の感情を害することであり、人の思惑を考へぬ無作法のことだとされた。卽ち人の心持を重んずるから、こちらの態度を控へ目にして、自然にこちらの心持の映るやうにと、動作をする。控へ目勝ちである結果としては、人の氣を害せぬやうに、その場に落つかせてゐるやうにと、お客を取扱ふ事には努めるが、積極的に面白くさせようといふことには、不得手であるやうに思はれる。さうするには、集會などでは、積極的に自分が先立つて、踊りもし歌ひもせねばなるまいが、日本人は、その點において極めて消極的で、人にまかせ過ぎる。かの假裝舞踏會の如きは、日本人の最も不得手とする所である。社交生活に於ける歌ひ手でも踊り手でもない。他國民と比較して歌はぬ國民であり、踊らぬ國民である。これも、人前で憚らずに自己を出すことを好まない性質から來たものである。殊に日本婦人は、先にもいつたやうに、極めて遠慮勝ちで、いふべき事さへいはずに濟ますといふ有樣である。集會などに於いて、

既に先にゐる者は、さきに歩いて座席をとらねば整理もつかないのに、遠慮して一向先に進まずにゐるので、いつまで立つても、整理がつかぬといふ有様を呈する。歩くにも極めて靜かにゆるやかに、そして挨拶は極めて丁寧である。かゝることは、あまりに遠慮すぎると思はれるほどに、控へ目の態度を示してゐる。要するに、自己發表・自己誇張を好まぬ日本人は、最もプロパガンダの下手な國民である。

人の面前ではにかむことは、より多く日本婦人に見える性質かも知れないが、これも今いつたやうな態度で、自分を他人の前に殊に公衆の前に、露出することを好まないからである。出しやばることは、遠慮すべきことだと、習慣的に敎へられて來てゐるからである。よく語られる事だが、日本人は何か土産物を人に與へる際にも、「これはつまらないものですが」と斷りをいつて、それを呈する。西洋では、むしろ、その土産物がその人に與へるに價値あるものと見て、即ち、「これはよいものであるから差上げる」といふ態度で、品物を呈する。日本とは逆である。日本人がつまらぬものであると言ひ譯するのは、心から全くつまらぬとは考へてゐないのであるが、よいものと誇りげに差上げるのは、受け取る人の評價力を無視して、押しつけがましくきこえるので、むしろ、他人の評價にお預けして、自分の評價を決定したものの如く語らうとしない、遠慮勝ちの態度を示すものである。かういふ場合に、よく外國人は、日本人は嘘をつくと考へるが、成程自分では相當なものと信じてゐながら、口でつまらないものといふのは、その點で、眞理を語らぬことになるので、嘘つきと考へられるかも知れない。しかし、もう一歩立入つて考へれば、その心は嘘をいふつもりではなく、他人の心持を尊重し、他人がどう思ふかを遠慮して、自分の評價より他人の評價が高いかも知れないと思ふ謙遜の心を示してゐるのであつて、眞心を以て他人の心を尊重するからであるといひ得る。尤も、かういふいひ方は、習慣的な形式的ないひ方で、常に意識的に用ひられる譯ではないから、さういふ言葉の使ひ方を、よく知つてゐる外人は、これを決して嘘とは思はないであらう。とにかく、自分の心持を積極的にあらはすよりは、他人の心持を尊び、それに任せ、それに同情して行かうといふ樣な態度が、日本人に存する。

かういふ心のあらはれ方は、色々の場合に觀察し得ることである。今日こそ西洋流の習慣も加つて、日本人の衣服は外觀的にも、綺麗に、はなやかになつてゐるが、從來の習慣によると、婦人の着物などは、下着ほど綺麗に彩られたものを着るといふことになつてゐた。外面には、けばけばしくあらはさず、內につゝましく、多くの美を包藏してゐることを美的修養、即ちたしなみと心得た。いはゆる澁味といふやうなことは、さういふ點をいふので、今日も趣味生活にこつた、

いはゆる通人は、さういふやうに隱れてゐる所に、美をもつてゐることを愛重する。また日本人は、口數はきかないが人に面會する場合には、初對面の人にも常に微笑を以て迎へる。微笑は日本人の友情性をあらはす特徴だと外國人にもいはれてゐる。まことに微笑は友愛の情をあらはしつゝ、しかも、おのづから色々の思ひを含蓄してゐることを表徴する。そして日本人は極端な表情をなすことを好まない。これも含蓄的であり、內包的であり、控へ目勝ちであることを示す。それであるから、極端な表情を介して樂しむ所の映畫に於ては、日本人の顏の表情は、いかにも單調で淋しく思はれ、その身振り手ぶりも、大げさに表現されてゐない。映畫などでは、もつと大膽に表情をあらはしてもらひたいとも思はれるが、實際生活に於ては、仰山な身ぶり手ぶり面付きは、好ましくないとされる。外國人の大げさな露骨な表情の仕方は、日本人には出來ない心的態度である。日本人は、外國人のやうに接吻したり握手する習慣をもつてゐない。友人の間には、時に握手を以て親愛の情を表はすこともあるが、それはむしろ略式で本式ではない。また例外である。公衆の前で接吻するなどは思ひもよらぬことである。肉體的に露骨に自己の感情を發表することを憚る日本人は、「いはぬは、いふにいや優る」心の動きを、互に見拔く力をもつてゐる。卽ち互に言葉にも顏にも身振りにも、仰山ないひ現はし方や表情を用ひない日本人は、一面に於ては、極めて鋭敏な直覺力・推察力をもつてゐるので、それで足らぬ所を埋合せしてゐる。卽ち、含蓄的で控へ目の日本人は、互に積極的に露骨に自己發表をしないが、その代り、言葉のはしや、身ぶり手ぶりの少しの變化を見ても、そこにいかなる心の示されてゐるかを、さとく直觀する心の働きをもつてゐる。であるから、直觀・忖度する力と含蓄的であり控へ目である態度とは、相伴ふものであることがわかる。

かの能樂なるものは、外國人に珍しい藝術として珍重されるものであるが、その眞の味ひを本當に了解するのは困難であらうと思ふ。能の面の如きは一見すると、まことに無表情なものである。喜怒哀樂の表情、何れともわからない面付きである。泣いてゐるやうでも、笑つてゐるやうでも、また怒つてゐるやうでもある。いはゞ無表情的表情である。しかし、そのどつちつかずの表情をもつてゐる同じ面は、その舞が意味し、その舞に伴ふ歌が意味する場面場面に應じて、それに思ひ入つて見てゐる觀衆には、時には非常に悲しみ、或は非常に怒り、或は非常に喜んでゐるやうにも見える。あやつり人形の芝居も、まことに外國にない無二の藝術であるが、それも一定の表情しかもてない人形を踊らせて、多樣の人情を表現する。その人形を、義太夫の語り物に合せて、巧みに器用に踊らせるのであるが、それが實に、生ける人間の如くに、その場面場面に應

じて、十分に觀衆の心に多面の感情生活を味はしめる。これらは皆含蓄味を帶びた藝術である。見る人聽く人に豐かな想像を起させて、そこにいふべからざる藝術味に浸ることを得しめる。かの鎌倉の大佛は有名なるもので、觀光客の何人も見逃してはならないものであるが、その表情は、極めてゆつたりと落ちついた深味をもつたものである。極端な表情はないが、何となく內面生活が無限の鑒ひと美しさをもつて、人間の有する情操を含蓄して、しかもおさまつてゐるやうに見える。いはゞ、平凡の偉大さを示してゐる表情である。外人觀光客にも、この無特徵のやうな、しかも精神的に偉大なる含蓄味を示してゐる表情を見て、深い感興を味ふ人もあるやうである。ここに東洋人乃至日本人の精神生活の態度が表徵されてゐることを悟るものもあらう。

喜怒哀樂を色々にあらはさぬことは、英雄豪傑の態度とされるところであるが、武士の修養はそれであつた。非常の場合に臨んでも騷がず、おびえず、自己の感情を統制して、靜かにして、しかも張りつめた態度を持することであつた。平生の生活に於ては、利慾に囚はれぬ克己的な生活を積むことであつた。但し一種の道德的名譽心は武士の心を深く支配した所であるが、武士の生活が克己を專らとして、剛健な鍛錬生活を營むことであつたのは、前にも述べた如くである。戰ひに臨んでは、華々しく勇敢に振舞ふ武士であるが、平生の生活に於ては、禮儀作法を尊び、質素な嚴格な態度をくづさずに、自制的な生活を營むのが、その眼目であつた。切腹といふが如き場合に於ても、あわてず、騷がず、落ついた態度で、自決することが尊ばれた。これらは皆、內面生活の自律を尊び、自己の感情や慾望を抑制する生活態度である。この克己自制の態度は武士を介して、日本國民一般の修養に影響したことは、いふまでもない。さういふ內面生活の自制力を尊ぶ生活態度は、歌舞伎芝居に於て、數多く演出される場面である。その有名なものには、政岡といふ大名の奧女中の話がある。政岡は殿樣の幼君を預つて、我が子と一緒に育てゝゐた。ところが、大名の後繼者をどの子に定めようかについて、暗鬪が起り、反對側に立つ連中は、秘かに政岡の預つてゐた幼君を毒殺しようと企てた。そして、反對側の家老の使ひとして一人の婦人が毒の菓子折をたづさへて政岡を訪ね、その幼君に召上がるやうにといつて差出した。政岡はそこに計畫のあることを直覺し、その場に居合せた自分の子に、その菓子を食べるやうにと目くばせした。その子は卽座に毒菓子を喰べて苦悶し出した。それを見た使ひの婦人は非常に驚き、計略のあらはれることを恐れ、若君への菓子を横取りした無禮者と叫んで、短劍を以てその場で政岡の子を刺し殺した。それを見た母政岡は少しも騷がない。我が子の殺害されるのを目のあたりに目擊しながら、幼君を抱きしめつゝ涙も流さず、驚きもせず、じつと見守つてゐた。その平

然たる態度を見た使ひの婦人は、これは政岡が自分の子と若君とを替へ子にして育ててゐたのである。自分の子なら、あわてさはぎさうなのに、一つも驚く樣子はなく、若君を抱いてゐるのは、實は、その若君こそが自分の愛子で、殺されたのが本當の若君であるのだと思ひ込んで、却つて目的を果したことと安心して歸つた。その婦人の直覺は實は輕率で、間違つてゐたが、かく思はせる程に、政岡は我が心の驚きさはぐのを抑へて、沈着に振舞つたのである。しかし、その婦人が得意氣な薄笑ひをして、その場を立去つてから、獨り居る政岡の深酷の嘆きは、觀衆をして腸を絞り涙を溢れしむるやうな場面を呈する。これは義理と人情との葛藤の極みをあらはす藝術である。この抑制の後の一人の悲嘆は、芝居であるから、あらはされるのであるが、實際生活に於ては、人の前にあらはされる所は、感情を抑制した生活態度の場面だけである。ここに女ながらも、武士の妻たり母たるものの、克己生活の修養態度を窺ふことができる。しかし、これは實演せる歌舞伎を見、日本語も十分にわかるのでないと、間接には外國の人々には、その心境を味はふことは及び難いことであらうが、とにかく、かういふ例によつても、感情を自制する生活が、武士的態度であり、そして、それは武士たるものの妻にも母にもあらはれ、また國民一般にも、その態度が高く評價されてゐる。

前に述べた能樂に於ける舞は、武士社會に味はれたものであるが、表情を十分に發表するダンスとは異なり、表情を包んで自制的態度において舞ふものである。その手を動かし、足を運ばせる仕方は、常に自制心を以て舞はれてゐる。武士が、その主君に所望されて、その前にまふ舞は、或は足早に進み、或は飛ぶが如き態度もとるが、どこかに力を自制して控へ目に踊る。そこには克己心が表徵されてゐる。一體、日本の踊りは西洋の踊りに比べると、遠心的でなく、求心的であり、發表的でなく自制的である。即ち含蓄的であり、暗示的であり、常に運動の控へが示されてゐる。これに比すると、西洋の踊りは極端に發表的であり外延的である。その手の指す所、足の飛び立つ所は、思ひ切つて外部に延長され、出來るだけ、內部の思ひと力とを四方八方にあらはさうと努めてゐる。即ち思ひ切つた自己活躍・自己表現の美が示される。然るに、日本の舞踏は、前に進むが如くにして後に退き、飛ぶが如くにして屈み、婉曲にして纖巧な手足の動きは、一種のリズムをなして、微妙に働かされてゐる。決して西洋のダンスのやうに跳び、はね、手足を思ひ切つて高く遠く差し出すといふやうな表現でない。非常に運動が複雜であり、多方面的であるが、常にどこかに力の自制が働いてゐる。指しただけ、突いただけでなく、婉曲に戻るやうに舞つてゐる。いはば蝶の舞ふが如くである。日本人の自制的な控へ目勝ちな態度がそこにもあ

らはれてゐる。そして極端な裸體姿はなく、美しい衣裳をまとひ、長い袖や美しい裾と共に一緒になつて、速かに複雜に、しかも落つきあるやうに婉曲に踊られてゐる。自然と共に生活することを好む日本人は、舞踊においても、自分の身を包む環境である袖や裾や帶と、一緒に踊つてゐる。決して自分の肉體のみの美を表はすことを求めない。即ち、人間本位的な表現でなく、人と環境と一緒になつた表現である。なほ他言をもつてすれば、西洋の踊り方は、より多く動的であり、日本のは靜的であるといへよう。踊りである以上、動的には相違ないが、手足を單に伸ばすだけでなく、飛び跳ねるだけでなく、その伸ばしはねる態度の中に、常に抑制の力が働いて、全體として婉曲自在の姿をあらはしてゐるから、むしろ靜的といへるわけである。なほかつ、日本舞踊の特長は、單なる身體的の微妙なる活動でない。西洋の踊りは、或る點から見ると、體操の發達したもののやうにも見える。體育上からも立派なものと評され得る。しかるに、日本の踊りは、單なる身體の運動美の形式的表現ではなく、常に心的意味を伴つてゐる。微妙なる手先の運動、婉曲なる腰の動かし方にも、一々それは何事かの意味を寓してゐる。即ち意味表現の踊りである。そこには、心的生活の意味を含蓄してゐる。從つて多くの場合、歌に合せて踊られる。即ち日本の踊りは含蓄の舞であり、暗示の踊りであり、寓意の踊りである。單なる形式的な運動美ではない。近來は、西洋のダンスを加味して新しい型の日本舞踊も創造されてゐるが、何れも常に意味を含蓄し、それを暗示する踊りである。事物の心を直覺し忖度することに長じてゐる日本人にとつて、それが極めて興味深いものであるのも當然である。

この自制的または、抑制的である態度乃至傾向は、かかる身體的運動の方面に於てばかりでなく、聲の出し方にもあらはれてゐる。西洋人の歌は出來るだけ喉の奥から深く一杯に聲の出るやうに修練されてゐる。細かい微かな節もあるが、日本人の發聲法に比すると、遙に大膽に發表的である。然るに日本人の聲の出し方は頗る抑制的である。しぼるやうに、さへぎるやうにして、その間から聲がにじみ出される場合が多い。日本人の大衆が好む浪花節の如きは、その著しいものである。歌謠の如きも、その纖巧の聲と節廻しは、頗る發聲上の自制を要するに相違ない。その他長唄や常盤津や義太夫等の語り物についても、西洋のそれに比すると、より多く抑制を要する聲である。そこには巧者であることを要することにもならう。しかし、これは他面に於ては、濕帶から熱帶にかけて住む人種の喉頭の生理的組織に原因することであるかも知れない。

以上、色々の場合を介して日本人の心の用ひ方、力の使ひ方について、自制的に控へ目にし、常に餘地を存じておくことを述べたが、昔からの武道を見ても、それがわかる。槍の使ひ方につ

いても、槍の鋒先を先方に向けて突き出す時には、同時に引く手を用意してゐる。突くよりは引く方が早いとさへいはれてゐる。即ち、そこに力の締めくゝりと自在の働き方とが修練されてゐる。劍道に於ても、激しく打ち合ふ間に於ても、必ず一歩の餘地を身體に存するやうに工夫されてゐる。自制のきかぬ、あがきの取れぬやり方は、達人でないとされてゐる。柔道や相撲も同樣で、單に力一杯出すことが能ではない。敵の力を利用しながら、こちらの力を有效ならしむるやうに、力の使ひ方を支配することが肝心である。かかることは、運動競技なるものの性質から割り出された力の用ひ方でもあらうが、大きく觀察してみると、かゝる場合に於ても、日本人の考へ方、行ひ方の特質が示されてゐるやうに思ふ。相撲を見てゐる外國人は、力士が互にしやがんで、ねらひあつては中止し、同じ事をくりかへし、中々立ち上らないので、ただ無駄の時間を費すやうに思ふであらうが、日本人にとつては、そこに一種の味ひを感ずる。力士が心中に色々と工夫して、ねらひをつけてゐる所に同情同感して、一擧一動に含蓄された態度を味つて面白く感ずる。かやうにお互に力をためて、立ち上るや、互に力鬪し、その勝負は極めてすばやく、一、二分にして終るのであるが、これは互に内にこめられた力が、一度に發せられた結果である。

見てゐて最も長いのは、茶席で茶の湯のふるまひにあづかる時である。靜かに坐つて、一杯の茶を受けるにも長い時間を要する。辛抱・忍耐・克己の態度は茶席に附きものである。この樣子を見た外國婦人が、一杯のお茶に一時間もかゝるとは驚いたことだ、と本當に驚嘆してゐたが、これが一種の自制的な修養法である以上は、當然のことである。一面には、氣の短い性向のある日本人には、よき修養法である。そして教養ある日本人は、かゝる態度に趣味と意味とを感ずる。

俳句については、これまでも度々述べたが、簡單な十七文字の中に、自然の敍事に托して、或る心持を詠むには、そこに十分な含蓄味を持たねばならないことは、いふまでもない。言葉は簡單であるが、それを讀む者をして、色々の想像を浮ばしめて、含蓄する所を味はしめる。前に「あはれ」といふ心持、「さび」とか「澁い」とかいふ情趣について語つたが、それも表に一切をあらはさないで、内部に裏に、多くの含蓄味を暗示してゐる、控へ目の態度であることに外ならない。

西洋人の部屋を見ると、その人の持つてゐる珍しい繪や置物、その他の骨董品は出來るだけ多く、そこに陳列されて、客の眼を樂しますやうに出來てゐる。しかるに、日本人の家では、床の間には、一幅のかけ物がかけてあるだけであり、違ひ棚には一つ二つの置物が備へられ、活花も一鉢位が床の間に配せられてゐるだけである。いかにも要領よく整つてはゐるが、多くを配列し

てゐない。しかし、その少し示された品物の中に、或はその配列の間に、含蓄味のある奥床しい趣味生活を察することが出來る。卽ちすべてを仰々しく示さぬ所に、主人の心がけの床しさも味はれる。一つ二つを見せて、御客をして、その心に餘裕をもたしめ、想像の自由を得しめることを尊ぶ。勿論、その人の所持してゐるものは、そこに取り出されてゐるだけではない。戸棚に或は倉に多くのものが藏つてある。そして折節に取りかへて部屋を飾る。要するに、外部にすべてを露出せず、內に藏ひ、少しづゝ示して、後に餘韻を殘し、人をして想像をめぐらして樂しむ餘地を與へておくのは、床しさや、澁味を尊ぶ日本人の趣味生活の特質である。

これに關して、極端の例は、茶の湯の達人利休が、時の英雄・豐臣秀吉を自分の茶室に招待した時の話である。利休は朝顏の花作りの名人でもあるといふので、咲きにほふ朝顏を一朝見たいと、秀吉は所望した。或る日、招かれた秀吉は、利休の邸宅を訪れてみると、庭はきれいに掃除されて、一つの朝顏も植ゑてない。不思議に思ひながら、茶席に招れて室の內を見ると、そこには青銅の花瓶に朝顏の花が一つ挿してあるだけである。朝露の滴るばかりの綠の葉のついた眞白の大輪ただ一つ、その小さいさびた茶室に、美の生命を表徵してゐる。秀吉は利休のかかるもてなし振りに感心したといふ。これは表徵の美であり、餘韻の美であり、想像の美であり、含蓄の美である。ただ一つの朝顏の花。心なしに見れば、ただそれだけである。心眼を開いて見れば、その一つの花は、朝顏のすべての生命美を表徵する。簡單のただ一つのわびしき存在であるが、そこに却つて想像に耽ける餘地を與へ、その一輪に心は集注されつゝ、その一輪を通して、萬象の心を洞察直觀せしむる感がある。

前にも述べたが、我々の修養上、いはゆる禪味が尊ばれることがあるが、それはいはゞ、いひがたきところに多分の含蓄味をもつことである。禪語に、一物なき所無盡藏といふのがあるが、かれこれと語らぬ所に、かれこれといひ盡せぬものの內藏されてゐることを指すものである。大賢は大愚に似たりといはれるやうに、能くわかつてしまへば、何もいふことはない。何もいはないから愚者のやうに見えるが、それは大智を構へてゐるから、別段かれこれいひわけすることもないためである。卽ちいはゆる無とは、單なる無ではなく、一語一字ではいひつくしがたく、千言萬語にひらき得るものを含蓄してゐるからである。無といふことが、日本人乃至東洋人の哲學的原理などといはれるのも、これである。

東京市の最初の建設者・太田道灌といふ文武に長けた有名な武士が、或る時、にはか雨に會つて、田舍家にかさを借りに立寄つた。すると、內から現はれた美しい娘は、雨に滴る山吹の花束

を道灌にささげながら、物は語らずに、示したのは、「七重八重花は咲けども山吹のみの一つだになきぞ悲しき」といふ三十一文字の歌であつた。その意味は山吹の花には實ることがない。そのやうに蓑一つだになき貧しき恥づかしき暮らしだ、といふなぞ歌であつた。道灌は、その娘の美しき心に感心し、自ら歌道をはげむやうになつたといふことである。意味は簡單な言葉のしやれといふほどのことであるが、極めて能く言ひ傳へられた事柄である。そして、ここに日本人の心理的特質を見出すことが出來る。物いはぬ少女は、控へ目で自制的で自己發表的でない。山吹の花に托して、己が思ひを忖度せしめてゐる。それは表徴的である。そこには含蓄味がある。そして、その意味を知るには想像豐かな直覺力を有しなければならない。

七、結　論

私は以上、日本人の國家生活・社會生活・家族生活等に關する道德的思想的特徴を述べ、且つそれと不離の關係にある各種の心理的性質を述べた。その分類については、私見に基いて、以上の數項を擧げたのであるが、既に讀者の氣附かれる通り、その區別は確然と分類し得べきものでなく、相互に聯關あることがわかるであらう。從つて、或る項においての說明は他の項と重複することもあり、また、別の項に於て說明した方が適當であると思はれる場合も、少くなかつたであらう。要するに、日本人そのものの文化生活に於ける心的特徴を語るのであるから、見方を變へて、色々に分析して語つては見るものの、結局は、具體的な日本人の心的生活態度を語ることであるので、何れの項目も、互に聯關して來るのは當然であらう。それであるから、一括して分離せずに述べることも出來ぬわけではない。しかし、我々の思想の約束として、物事を說明するには、一應の分類を試みねばならぬのであるから、また、さうすることが他人の理解を助けることにもなるのであるから、出來るだけ、自分等の心を反省的に批判的に分解して見て、以上の如

き特質を數へあげて見たのである。しかしながら、同じ日本人といつても、それぞれに自己批判の見方を多少異にする所もあるのは無論のことであるから、私のこの批判的の敍述が、日本人の文化生活の全面をつくし得たものといへないことは、いふまでもない。また自分ながらも、思つてゐても、いひつくさないことが相當にあることに氣附いてゐる。また且つ、外國人は外國人の見方によつて、日本人の內省的に氣のつき難い點を觀察し得るはずであるから、その批評は、獨自の立場に於て試みられることを期待せねばならない。それは我々が他山の石として自己を磨く材料としたい。

かやうに述べて來た我々日本人の文化生活に關する心的特質は、いふまでもなく、過去の歷史的生活に顧み、現在の生活態度に察して、その一貫せる特徵と思はれる所を指摘したのであるが、未來永劫、日本人の文化人としての特質が、これのみに止まるといふことは出來ないであらう。何となれば、既に述べたやうに、我々は過去に於ては、印度の佛敎や支那の儒敎、その他、各種の生活樣式を取り入れて、我が國民生活の中に同化し、明治維新以來は、歐米の文化をとり入れて、我がものとして新しい文化生活を築き上げつゝあるのであるから、將來に於ても各種の外國文化移入の結果が、我々の道德的な心理的な生活態度の上に、幾多の影響を及ぼさないはずはない。卽ち將來に於て、これまでに、あらはに見えなかつた心的特質が日本人の精神として養成されてくることも期待し得る。日本人の持つ精神は、ただ過去に見られることばかりではない。將來に於て更に創造されて行かねばならない。卽ち日本の精神は、昔ながらの國體精神を維持しながら、永遠に未來に向つて生長發育するものでなければならない。かう見ると、私のこれまでの心理的解釋は、日本人の未來の文化的特質を豫め限定するものでないことは勿論である。國際關係は極めて抗爭の狀態にあつても、それだけ互に彼を知り己を知つて、その短を補ひ、その長を伸ばして行かねばならないから、今後は益ゝ國際關係は緊密の狀態にならねばならない。戰ひは排外であつても、文化は排外であることは出來ない。大戰の後に、文化の大交流のあるべきは當然である。その間に立つても、常に古くして常に新なる我が日本國乃至日本國民は、本來の國民性に培ひながら、內に潛めるものを育てあげ、他にあるものを同化し、何物か新なるものを創り出して行かなくてはならない。

昭和十七年二月十五日　第一刷印刷
昭和十七年二月十八日　第一刷發行

日本文化と國民性

〔定價壹圓八拾錢〕

著作者　東京市本郷區駒込千駄木町五二　大島正德

發行者　東京市日本橋區吳服橋二ノ五　神田龍一

印刷者　東京市四谷區本村町四番地　鈴木芳太郎

印刷所　東京市四谷區本村町四番地　玄眞社印刷所

製本所　東京市麹町區假田町一ノ一六　河手製本所

發行所　東京市日本橋區吳服橋三ノ五　株式會社　春秋社松柏館
振替東京二四八六一番
電話日本橋二六二四番

（日本出版文化協會會員登錄番號112562號）

配給元　東京市神田區淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社

（小社發行書籍中亂丁・落丁等の不完全品がありました節は御申出で下さい。早速御取替致します。）

春秋社思想選書

- 石川フ湧ゲ著譯 **讀書術** B6判上製二二四頁 價一・三〇 〒一〇
- 柳田カーライル泉譯 **サータア・リザータス** B6判上製四八八頁 價二・五〇 〒一四
- 柳田J・Sミル泉譯 **自由論・功利論** B6判上製三八四頁 價二・〇〇 〒一四
- 内村達三郎譯 **基督のまねび** B6判上製四一四頁 價二・〇〇 〒一四
- 内村達三郎譯 **アウグスチヌス懺悔錄** B6判上製五六二頁 價三・〇〇 〒一四
- 加藤一夫トルストイ著譯 **我等何を爲すべきか** B6判上製四三六頁 價二・〇〇 〒一四
- 石川グウルモン湧著譯 **哲學散歩** B6判上製三四〇頁 價二・〇〇 〒一四
- 濱田恒一ケインズ著譯 **經濟學の領域及方法** B6判上製三六二頁 價二・〇〇 〒一四
- 谷島彦三郎ウオールトン著譯 **釣魚大全** B6判上製三四〇頁 價二・〇〇 〒一四
- 佐久間政一ショーペンハウエル譯 **論文集** B6判上製四二八頁 價二・五〇 〒一四

春秋社思想選書

- 石川グウルモン湧著譯 **文學散歩** B6判上製三六八頁 價二・〇〇 〒一四
- 宮原晃一郎キエルケゴオル著譯 **憂愁の哲理** B6判上製三六〇頁 價二・〇〇 〒一四
- 柳田カーライル泉譯 **英雄及び英雄崇拜** B6判上製四九六頁 價三・〇〇 〒一四
- 柳田エマアソン泉譯 **代表偉人論** B6判上製三八〇頁 價二・五〇 〒一四
- 戸川秋骨譯 **マコーレイ論文集** B6判上製四九〇頁 價三・〇〇 〒一四
- 田制佐重ペスタロッチ著譯 **ゲルトルードは如何にその子を教ふるか** B6判上製三六〇頁 價二・五〇 〒一四
- 宮原晃一郎ブランデス著譯 **黎明期の思想家** B6判上製三一四頁 價二・〇〇 〒一四
- 柳田カーライル泉譯 **フランス革命史 第一卷** B6判上製五四四頁 價三・〇〇 〒一四
- 柳田カーライル泉譯 **フランス革命史 第二卷** B6判上製五七六頁 價三・〇〇 〒一四
- 柳田カーライル泉譯 **フランス革命史 第三卷** B6判上製六〇八頁 價三・〇〇 〒一四

春秋社刊行書目

高田眞治 文學博士 著	支那思想の研究	A5判上製五九二頁	價四・五〇 〒一四
市村瓚次郎 文學博士 著	支那史研究	A5判上製六〇四頁	價四・五〇 〒一四
常盤大定 文學博士 著	支那佛教の研究	A5判上製五四二頁	價三・八〇 〒一四
常盤大定 文學博士 著	續・支那佛教の研究	A5判上製五一八頁	價四・五〇 〒一四
高田眞治 文學博士 著	支那哲學概說	B6判上製二五六頁	價一・〇〇 〒一四
深作安文 文學博士 著	倫理學概說	B6判上製一四二頁	價〇・九〇 〒一四
入澤宗壽 文學博士 著	教育史概要	B6判上製一八四頁	價一・二〇 〒一四
柳田泉 編	世界名著解題（I）	A5判上製六二六頁	價四・五〇 〒二二
柳田泉 編	世界名著解題（II）	A5判上製六二六頁	價四・五〇 〒二二
柳田泉 編	世界名著解題（III）	A5判上製七〇八頁	價五・五〇 〒二二

春秋社刊行書目

大久保道舟 編	道元禪師全集	A5判上製八六六頁	價七・五〇 〒二二
文部省推薦圖書 川島つゆ 著	芭蕉七部集俳句鑑賞	B6判上製七四四頁	價四・五〇 〒二二
原田道寛 著	大日本刀劍史（上中下）	A5判 各六五〇頁	價各一〇・〇〇 〒三
門馬直衛 著	音樂の鑑賞	B6判上製五二八頁	價三・〇〇 〒一四
桑木嚴翼 文學博士 著	プラトン講話	B6判上製二四四頁	價一・四〇 〒一四
永井潛 醫學博士 著	新生命論	B6判上製二八六頁	價一・八〇 〒一四
大島正德 著	日本文化と國民性	B6判上製二八八頁	價一・八〇 〒一四
宮島幹之助 林髞 編	明るい家庭醫學	A5判上製三〇四頁	價一・六〇 〒一四
宮島幹之助 林髞 編	教養としての家庭醫學	A5判上製三二〇頁	價一・八〇 〒一四
高野六郎 著	新結婚讀本	B6判上製四四八頁	價二・五〇 〒一四

春秋社刊行書目

鷲尾雨工著　吉野朝太平記（全六卷）（既刊）　B6判平均五〇〇頁　價各一・五〇　〒一四

鷲尾雨工著　歴史小說　安土桃山　織田信長篇（全七卷）（既刊）　B6判平均四〇〇頁　價各一・八〇　〒一四

鷲尾雨工著　歴史小說　安土桃山　豊臣秀吉篇（全五卷）（未刊）　B6判平均四〇〇頁　價各一・八〇　〒一四

鷲尾雨工著　歴史小說集　北畠親房　B6判上製三六八頁　價一・八〇　〒一四

鷲尾雨工著　歴史小說集　菊池決戰　B6判上製三八四頁　價一・八〇　〒一四

鷲尾雨工著　劍豪物語　B6判上製三二四頁　價一・五〇　〒一四

原田道寛著　日本刀私談　B6判上製三七四頁　價一・六〇　〒一四

920
215

終